

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

【特集】 問い直そう、保育の中のアたりまえのこと
「規範意識」って何だろう？

【子ども学探訪】 倉橋惣三とキンダーブック
昭和初期の「よいこども」観の変化

【海外レポート】 イタリア保育“おもいきって”参観記(3)
未就園児と家族の集う「ルド テカ」

夏 2013

since 1901

指導・研修にお役立ち!

実際に使われた実例が充実!



「はる・なつ編」も
あわせてどうぞ!



10922

保育が伝わる 心がつながる

おたより実例集 あき・ふゆ編

今井和子/編著 定価2,205円(税込) 26×21cm 10923

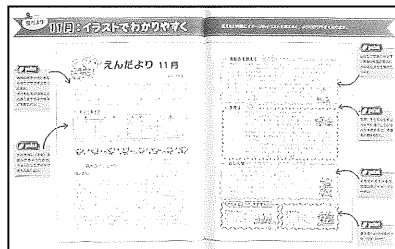
128ページ+カラー口絵4ページ CD-ROM付き

※CD-ROM仕様

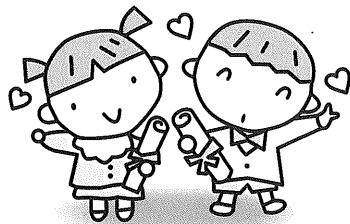
対応OS: Windows2000以降、Mac OS10.X

アプリケーションソフト: Microsoft Office Word97以降

①全国の幼稚園・保育所の 実例から厳選



本書の実例は保育者が限られた時間の中で実際に作成した内容なので、現場で役立つアイデアが満載。すべての保育現場で活用可能です。



②多種類のおたよりを紹介

園だより

クラスだより

子育て支援

保健・食育

行事

その他

園だより～保健・食育～地域子育てなど、保育現場で使われる役割の違うおたよりを紹介しています。Pointを参考に、多様な視点で保育内容や発信内容を捉えることができます。

③CD-ROM付きで便利



自園に合った行事のおたよりがすぐできるテンプレート入り。モノクロ&カラー(各2種類)から選べます。また、本書で紹介していないテンプレートもあります。



てづくりのかばんを持って、おでかけ

「ここは、ちょっとすずしいね」

子どもの情景

● 報告 ●

「実践を通して表現の源を考える」

刑部育子・ハーフミラー グループ・伊集院理子・中澤智子

50

● 海外レポート ●

イタリア保育“おもいきって”参観記(3)

未就園児と家族の集う「ルド テカ」

金澤妙子

58

● 研究 ●

『幼稚園』の原著者ベルタ・ロンゲのルーツをたどる 1

ベルタと幼稚園教育との出会い

インゲ・グロレ ・翻訳:ベルガー有希子 ・解説:大戸美也子

64

● 子ども学のひろば ●

学会 研修会情報・読者投稿・エピローグ他

71

プロローグ 「いいこ」と「よいこ」 浜口順子

「規範意識」を特集した。文字面だけ見ると、眉間にしわを寄せた気難しい校長先生のようなイメージ、少なくとも人間の自然な快感とは別の方向にあるような堅苦しさがある。しかし、どの子どもにも「いいこ」になりたいという規範意識の根がある。これは人としての自然だと思う。

昭和初期のキンダーブックで2回、「良い子」が特集されているが、それは時代とともに変遷する大人の「よいこ」観を示唆している。戦後の高度成長期には『よいこ』（小学館）という幼児向け雑誌が作られた。

現代において「よいこ」は、そんな名前

のお笑いタレントもいるように、どこか滑稽で、しかも古き時代のかび臭いメッセージ性を負った言葉だ。大人が子どもに価値観を押し付けることに、それほど反省的でなくてよかった時代の言葉、「よいこ」。現代はそんな言葉をせせら笑いながら、その子らしくその子なりに育つことをよしとする。しかし、一方で「気になる子」「ボーダー」「グレイ」などというあいまいな呼び名を新しくつくり出して、「別に悪い子ってわけではない。その子なりに育っているのだから……」と言いよどむ。その子がなりたい「いいこ」に目を凝らしたい。

目次

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
ステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

【写真】

子どもの情景 ①

【目次 プロローグ】

「いいこ」と「よいこ」 浜口順子 ②

【特集】

問い直そう、保育の中のあたりまえのこと 10

「規範意識」って何だろう？

座談会 友定啓子氏・中村万紀子氏・大森洋子氏
宮里暁美・浜口順子（編集委員） ④

冒険遊び場の規範意識 宮里和則 ⑮

《解説》規範意識に至る過程 内藤俊史 ⑲

【シリーズ】

子どもが育つ場所を訪ねて

幼小の豊かなつながりが実現 那覇市立金城幼稚園 かなぐすく 高橋陽子 ⑳

【実践研究】

私の保育ノートから

チャボが育ててくれました 吉岡晶子 ㉘

【保育エッセイ】

子どもたちの「現在」を考える ②

「いま子どもである人」にとっての「少子化」とは？ 本田和子 ㉜

【からだ考】

食べる・つながる・育つ

子どもにおやつを届ける 伊東奈那 ㉝

【子ども学探訪】

編輯顧問 倉橋惣三 とキンダーブック ⑥

昭和初期の「よいこども」観の変化 浜口順子 ㉞

特集
問

い直そう、保育の中のあたりまえのこと10

「規範意識」って何だろっ？



座談会

ともさだけいこ なかむらまきこ おおもりようこ
友定啓子氏・中村万紀子氏・大森洋子氏

友定氏は山口大学教育学部教授。中村氏は同学部附属幼稚園の副園長、大森氏は同幼稚園教諭。共著に『幼稚園で育つ—自由保育のおくりもの』（ミネルヴァ書房）、『保護者サポートシステム—もう一つの子育て支援』（フレーベル館）がある。

今回のテーマは「規範意識」。その「芽生え」の部分を幼児期にはぐくむことの大切さが、最近の幼稚園教育要領・保育所保育指針に盛り込まれていきます。ちよつと硬いテーマですが、現場の具体的な子どもの姿から、いろいろと楽しくおしゃべりしてきました。山口大学教育学部附属幼稚園を訪問させていただいたのはとても寒い雪の日でしたが、玄関に入った途端、ストーブの暖かさだけでない、居心地のよさに癒されました。友定先生と幼稚園とのしつかりした絆が自然と伝わってきた座談会でした。

「私はこう考える」の宮里先生のお話は、まさに「あたりまえ」を問われるものです。「規範意識」について頭を整理したい方、内藤先生の解説も必読です！

（編集委員 宮里暁美・浜口順子）



規範意識というテーマを聞いて

宮里 二〇〇九年に国公幼(全国国立幼稚園長会)が保護者や教員を対象に「子どものしつけ等に関する実態と意識についての調査」をしているんだけれど、その中で、公園のベンチに靴のまま上がるとか、ものを食べながら道を歩くとか、居酒屋に夜遅く子どもと入るとか、こういう行動が気になるかどうかという質問がありました。気になるかどうか、というそのあたりに、その人の規範意識の根っこがあるのかなと考えさせられたことを覚えています。

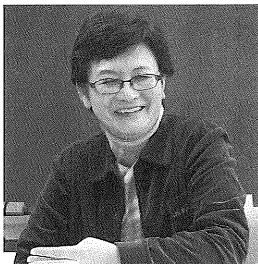
今、社会全体の規範意識が弱くなっていると言われていて、確かにそうかもしれないと感じることも多い。だから幼稚園で厳しく指導するという意味ではなくて、だからこそ何が幼児期に必要なとか、あるいはお母さんたちに何を伝えるのかっていうことを、本当によく考えたいと思っています。

大森 お弁当やおやつを食べる時に、「待っててね」とか「一緒に食べようね」と言いますが、もら

った瞬間に食べる子どもとかがいますよね。本人にとっては何の悪気もなく、こちらは、この子は家では多分一人で食べていて、待つとかいうことがないんだなと思ったります。それで、一緒に食べるのがこの園の中では決まりだよ、みたいなことを生活の中で知らせていくということがきつと大事なんだろうな。でもそれがイコール規範意識ということは思ったことはなかったです。

園生活の入リ口で

友定 ルールとか規範とか道徳とかっていうのは、私はあまり触れたくない領域なんです。何だか自分のことと思うと人には言えないわよみたいなところが一つある(笑)。それからもう一つ、この時代になって基本的に個人の自由が、最大の価値。人の指図は受けられない自分の責任でやりたいことをやるっていうのがライフスタ



▲友定啓子氏

イルとしても市民権を得ちゃっていると思うんですよね。それが基本にあるから、家庭も地域もそういうところがある。それに幼児っていうのは家の中では配慮されて、かなり自由にやっていいと認められる、そういう存在じゃないですか。

でも幼稚園に来たら、ほかの子とは対等で、向こうもこっちに向かってくるし、こっちも向かっていく。園生活というのは、どうほかの子と折り合って共生してやっていくかというのを個別にたくさん体験して、そういう感覚を養っていく場所だと思うんですよね。幼稚園での規範っていうか文化的な価値を体験していく。

浜口 自由でいたい反面、何でも自由にやっていいよっていうのは子どもにとって実は心地よくないという面もある。入園の時、お家とは違う幼稚園らしい生活というものを何となく楽しみにやって来る。でも現実はいまにも今までの生活と違うことに気が付き、反抗するというよりは、とにかく訳がわからず、どうしたらいいか戸惑うという感じではないか。

中村 うちの幼稚園の庭に汽車があつて、その汽車

で遊ぶことを楽しみに毎朝登園する三歳の子どもがいて、満足したらお家に帰るっていうところからその子の幼稚園生活がスタートしていた。汽車で遊ぶために来るの。満足したら生活の拠点である家に帰ろうとする。その子にとっては当然の気持ち。降園時間まで園で過ごさなきゃいけないことになり、泣くこともあるけれど、保育者といろいろやりとりしながら、汽車以外にも楽しいことや、うれしいことがあることに気が付いてくる。時間とか生活の流れも、そうやって生活しながらだんだんこういうものだったのかなと理解できていくのだと思う。一年が終わるころになると自分たちで「お帰りですよ」と呼び掛け合っている。面白いなと思って思ってたんです。
友定 子どもは、例えば靴箱に自分の靴を入れる、かばんをここに置くとかかっていうそういう朝の一連の行動を自分のものにした時に、気持ち安定してくるっていうことがありますよね。しかも同時に非常に合理的じゃないですか。そこに靴を入れなきゃ



どこかに行っちゃってすぐ混乱するわけでしょ。

中村 山口市では、少人数園同士が地域で二、三園交流を実施しています。違う園でも子どもたちが安心して過ごせるようにと、先生方が話し合って、訪問先の園でも自分のスモックなど掛けられるように個別の名前シールを貼って場所を作ってあげるところから始めたそうです。いいスタートが切れ、和やかに交流も進んでいったという感想を思い出しました。自分の物を置く場所が保障されているということが生活の拠点になるのね。

宮里 時々頑ななにかばんを置かない子とかいるじゃないですか。あれはまだ幼稚園を信用していません、ここに置いてねって言われても、もしかしたら本当は不安なのかもしれない。身から離れたら二度と……(笑)。そんな時にはどうしても置かせるのではなくて、じゃあ安心するまでは背負っていていいよっていうようにしていると、そのうちに置いていくようになっていく。

お帰りの時間を受け入れる

大森 例えば、お帰りの時間には集まってほしいですけれども、なかなか集まらない子どももいます。こちらは「今はね、集まるんだよ」ってことは言い続ける。言い続けながらも、でももう少し待たないと、とか、まだ無理だなどか思って、ほかの子には「待ってあげてね」などと言いながら、全体としては方向付けはしていくじゃないですか。そうするとたいていの子どもには、今は帰るんだから集まらなくちゃいけないんだなということが見えてくる。はじめは与えられたものかもしれないけれど、だんだん自分の中に作られていくことが規範意識の芽生えみたいなものじゃないかなって思います。

宮里 いくら言っても集まって来ない子のことを、そのことだけで評価してしまつたら、いけないんだというような声が出てきてしまうかもしれない。でも、「もうちょっと遊びたいんだって」とその子の状況をみんなに伝えたり、「待ってるよ」とこちら側の

気持ちはその子に伝えていく。約束事は変えてない
んだけれども、人には納得するまでにはいろいろ時
間がかかるとか、そういうことぐるみでその子ども
がわかるってことを大事にしたい。

友定 先生のペースタイプってどうか、先生が
どういうふうにその子を見ているかっていうのを子
どもは受けとめているんですね。大人の子どもに
対するまなざし。

幼児期はルールといっても、感覚とか感情とかに
とても引きずられるでしょう。幼児の場合、ルール
とか規範の納得の仕方っていうのがね、個別具体的
なものを通してしかできないんじゃないかと思う。
だから、その物は平等に使いましょとか、代わり
ばんこにしましょとか、手続きルールとかを先に
持つていってしまうと、自らルールに縛られた子ど
もみたいになって。具体的なこと全然考えずに、友
達に「片付けの時間よ、遊びやめなさい」とか言う
人いるよね。

大森 そういう子は「片付けだよ」って言って、人

が遊んでいる物を急に取り上げ
てしまったり、たたいたりとか
するんですね。形だけ入って
いて、自分にとっての片付けと
いう意味がわかっていない。相
手がまだ見えてないから、自分
の考えを相手に押し付けたりする。でも、相手が見
えてくると、どうも今無理矢理要求するのは違うら
しいみたいなのが、形じゃなくて自分の中に入っ
ていく。相手が友達として認識されたことによつて
何か入ってくるものがあるなって思いますね。

遊びの中で

大森 この間、三人の女の子がブランコで二人乗り
していたんですね。大きな縄ブランコなので、私が
押して、はじめは「そろそろ代わろうか」と促すと、
「うんそうする」とか「じゃあAちゃんとBちゃん
ね」と言いながら乗っていましたが、そのうち、自
分たちで、「そろそろ、まだ?」「うん代わろうね」



▲大森洋子氏

って、自然に代わり合ってる。どうしてこんなことが
ができるのかなって考えたら、そこにはやっぱり楽
しきがあるんじゃないかと思う。代わったら楽しい、
私も楽しいけれど友達も楽しいみたいな実感。

友定 遊びの中でも、鬼ごっことかよくルールをい
ろいろ変えてやっているよね。バリアがあるとか十
秒ルールがどうやらとか。

大森 四歳の時は先生が鬼をずっとやる時期がある
けれども、その時期ってやっぱり必要だと思いま
す。追いかけることが楽しいのは追いかける人がい
るからだってことがわかるから、今度は自分も追
かけてみようかなと思うんだろうし。鬼になりたく
ないっていう子がいると、四歳も後半になってく
ると、この子は鬼が嫌なんだよみたいなことを子ど
もが言う。鬼になったら交代するっていうことはわか
っているけれども、この子はまだ難しいからいいよ
っていうこともひっくるめてのルールというか。
宮里 遊びの中では、小さい妹とか弟がついて来た
らその子ルールにしちゃうっていうか、緩やかにし

てあげるとかいうのがありますね。

浜口 子ども特有のルールというか、大ゲンカして
いたと思ったら、いつの間にか笑い合って終わって
いるみたいな、理屈が通らない解決ってというのが
あって、感心してしまうのですが。

中村 もしかしたら、さんざん言い合う中で何かの
拍子に思わず笑ったら相手も
笑って、もうよしにしようみ
たいなことがあるのかも。言
うだけ言ったから、そのきつ
かけを待っていることってあ
りますね。



▲中村万紀子氏

大人の姿勢が問われている

友定 共同体的な感じがあると、徹底的に相手を破
壊するまでやったら自分も破壊されるんだからそこ
はすっと回避しようという知恵はね、絶対出てくる
と思うのね。剥き出しでやったらね、遊びが面白く
なくなるといえるのはわかるし、育ちの中で相手がど

ういう人なのかを互いにわかり合った時に、杓子定規のルールの展開ではいかない、この子はたつぷりやらせてあげようとか、自分はちょっと譲ろうとか、対等な人間関係だからってお互いに対等にやり合ってたらいつまでたつたつて決着つかないでしょ。

今のね、さんざんやり合った時にね、笑って面白いこと言ってずらして終わるっていうのは一つの知恵だし、自分がここは譲ろうとか、心の強い人が我慢できるとかね、一つの方向性だと思っただけで、そういうふうにして子どもが大人になっていくことを、ちょっとプッシュするとかね、そういうことも幼稚園の具体的なトラブルの中では伝えることができるよね。学校で外側からこういう規範のつとてみんなで行動しなさいみたいな形で出すとは違う育て方だと思っただよ。

中村 学校ではもうあたりまえのことで済まされ、教師が一つひとつ言わないですが、保育者は一つひとつに、「よく我慢できたね」「強かったね」と認める。幼児期はまだまだ大人が価値付けたり、見てあ

げたりする部分が大きいです。規範意識っていうと堅いイメージがするんだけど、自分が認められたとか、大事にされているとかが根底にあつて、だから友達も好きになれるし、仲間になっていくのだと思う。その部分を置いて、形やルールから入ると、ぎすぎすする。だからやっぱり大人の姿勢みたいなことが問われていると思う。子どもというよりは、大人の見方、待つてあげ方が独りよがりであいまいなんだろうと思う。考えて行動できるようになるまでは一筋縄ではいかない、個人個人で違うんだっていうところを、ていねいに理解した対応がもつと認められていいのではないかと思う。

だからこそ園生活を送る中で、いろいろな人がいることで実は成長しているという気付きをしてほしいな。「みんなで育ち合う」本園の精神です。みんなで育てみんなが育つことがどれだけ子どもにとって親にとって保育者にとって、大事かということ。

友定 そうだよな。人信じてもいいよねとかいうところとかね。

大森 大人がどうあるかという時に、お掃除とか片付けして、「きれいになったね、ありがとう」とか「気持ちいいね」「うれしい」とか、自分の気持ちを言葉で表したり、動作や動きで表したりすることってすごく大事だなんて思う。

それから、もう一つ、その子にとってわかりやすいように説明していくことはやっぱりすごく大事な仕事だなんて思っています。なぜそうするのか子どもたちにはわからないのだから、それを、わかりやすい、子どもの思考に合わせた形で、今こうだからこうしているんだよと言ってあげるの、一つ一つの大事な役割なんだろうなって思います。

友定 専門性だよな。

大森 そうですね。物が散らかってて、自分がそれをもたいで通るようなことしたら、物を大事にはできないし、物への愛着がないとやっぱり片付けもしないだろうしなって思うと、自分自身のあり方が問われているなって思います。物にも人にも愛情を持っていていうことが、生活の規範みたいなこと

とにつながるんだろうなと。

自分という準拠枠を求めて

友定 結局、人と共生するためのものなんだよね、ルールって。

大森 そうですね。でも、規範意識っていうのが本当に私わからない。一緒に生活する上で必要なことを身につけていくことって言ったら考えやすい気はするんだけど、規範意識って言われた途端に難しいぞって思ってしまう。

浜口 「道徳性の芽生え」のほうは幼児教育の中で比較的親しみやすい言葉ですが、最近、「規範意識」が入ってきた。規範って、私の中では、属している社会で共通に守るべきルールとして形式的に示されたもの、明文化されたもので、規範意識っていうのは、そういうものの中で生きることっていうことの意味を一人ひとり感じていくっていうことかなって思ってる。

友定 今日はいあんまり言わなかったけど、ルールで

もね、人を傷つけてはいけなとか、その部分も大きなテーマだよ、幼児教育の。殴ったり蹴ったり、ひどいこと言っはいけないとかね。そういうものの最たるものが法律でしょ。はっきり明文化して。傷つけてはいけない、傷つけたら制裁を加えるぞっていう大人社会。幼児の場合はそれはないわけだけどね。

大森 先程の帰りに集まらないことについてですけど、みんな待つてあげましょうと待てるようになることが規範意識だとは私は思っていなくて、待つこととで他者を意識しながら自分も意識して、集まらない友達もいるけれど自分はやっぱり集まろうっと思っうのが規範意識だと思って話をしました。待つてあげる自分を反映しながら、自分は集まろうっと思っう。



宮里 自分なんだよね。

大森 自分はっっていうのができ
ていくことかなあと。

友定 自分の準拠枠みたいなものだよ。

宮里 他律的なものではないように規範意識を育てたいなと思っうんです。でもそんなことあり得ないですか？ 誰かに注意されて守っっているっっていうのは他律？

友定 それは法律家の基本的な役割でしょう。悪いことしたら罰するぞっっていうのもあるけれども、罰せられちゃまずいから、やらないでおこうっっていう効果もあるので。他律的な部分はあると思っう。

宮里 でもその時にそのことが大事だとわかるとか、そうっいうふうにしたほうがいいな、そうやって人と一緒に気持ちよく暮らせたほうが楽しいな、気持ちいいなと思って守るっっていうふうには、特に幼児期ではしたいっと思っうわけですよ。

友達と平等であるという感覚

浜口 幼児期の道徳性は、人に褒められる、認めてくれるからっっていうのから始まって、だんだんと自



▲宮里暁美氏・浜口順子氏

律的なものになっていくけれど、十分理解できないルールでも、友達もみんな平等に同じ拘束を受けるというところで甘んじる面がある。平等は時にしんどいものでもあって。だから自分だけじゃなくて、隣の子もみんな同じこと言われて守ろうとしていて、そういうことで、そこにフェアな感じはあるんじゃないかな。

友定 ボール遊びとかりレーで、こつちが何人あつちが何人と数が違ったらフェアじゃないよねって、そういう思考は五歳くらいだよ。三歳はそんなフェアはいから自分がよければいい、言い過ぎだけど、自分に不都合がなければよしだよ。

でもよくほら、お帰りの行列の時に必ず一番でなきやダメみたいな人いるじゃないですか。ああいうのは何が育ってないの？

大森 一番がいいという声が多くなったところに、順番が一番になるようにしようねとかよくやるんですけど、四歳の十月か十一月くらいだと、子どもたちがだいたい受け入れてくれるんです。

でも今年十一月くらいに子どもたちに提案したら、「私はまだ一度も一番になつたことがない」「私もなつたことがない」って結構たくさんの子どもが言つて、順番が受け入れられなかつた。どうしてこうなのかと考えた時に、必ず自分にも順番が来るよつていう保障みたいなものが生活の中でされていないのかなと。片付けでもそうだと思うけど、明日もここに置いておいてあげるからつて言うのと納得することつてあるじゃないですか。明日もあるとか、必ず自分の番は来るといふような安心感や保障みたいなものがないと不安だつたりするのかなつて思いました。

浜口 私たちの頭の中ではつい計算的に、五つものを五人で分けるのが一番公平みたいに思うけれど、三歳の子がね、フェアがまだよくわかんないつていても、すごく自分を大切にされているつていうふうに思えば、ほかの子が大切にされているのも認められるつていうフェア感の源みたいなものはあるんじゃないか。その時は一人ずつ、1、1、1、なん



だけど、自分が認められているのが前提で、初めてほかの1も意味を持ち始めるような感じ。そこはあいまいなのに、五人で5分の1の扱いされたらとてもやってられないっていうような感じが三歳で、五歳くらいになると、ある程度5分の1でも自分を支えられたり、でも時々はちゃんと1で見えてほしいとか、そういう両面が出てくるのかなって。

大森 お帰りの時、お母さんが一番だね、とかって言うけど、そこに価値を置かないでって。

友定 思うよね。

浜口 大人は「一番がいい」っていう規範を持っていてる人が結構多い。

中村 かけっこなどで一生懸命走ったねっていう意味で、どの子にも「一番」って声掛けすることあります。私の中では一生懸命頑張るっていうその結果。自分の中で一番という意味で使っています。

(二〇一三年一月二十七日)

―座談を終えて―

いろいろ大事なことを聞いたのですが、ルールを理解して自分を守ろうとするという第一段階の規範意識に加えて、具体的な人や状況に即して、ルールをしなやかに受けとめていくことの重要性は全員で共感した点です。それが子どもの他者や自分へのまなざしを育てていくことにもつながると考えました。

ルールは他律的な性格を持つているけれども、それによって子どもが安定する側面もあり、保育者によって子ども一人ひとりの気持ちや認められ価値付けられることが、子どもの規範意識につながっていくことが話されました。また、保育者の専門性として、ルールについて幼児の思考や感覚でわかるように説明する力が重要であることも再確認しました。

(友定)



私はこう 考える

「規範意識」
って
何だろう？

冒険遊び場の規範意識

宮里和則
(プレイヤー)

規範意識とは何だろう。規範は誰のための規範なのだろうか。NPO法人「日本冒険遊び場づくり協会」理事の天野秀昭氏は、子どもは「あぶない・きかない・うるさい」存在だと言う。この存在をそのまま受け入れることの大切さを主張している。

もし、この「あぶない・きかない・うるさい」を正そうとする行為が規範であるなら、冒険遊び場はそこから最も遠い場所であるように思える。冒険遊び場は「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに、通常では禁止されているたき火や木登り、穴掘りなどできる遊び場である。泥んこになり、はしゃぎ回る子どもたちであふれている。規範が否定形ではな

く肯定形で語られ、生きていくためのあり方であるなら、ここにも確かに規範意識は存在する。

ハンモックに立ってもいいですか

私たちの遊び場の片隅にはいつもハンモックが吊るされている。のんびりと船ごっこをしてみたり、激しくブランコのように揺らし、落ちてみたり……いつも子どもたちは、ハンモックでも自由に思い思いの遊びを楽しんでいる。

ある日のこと、このハンモックで遊んでいる五年生女子グループがあった。激しく揺らしては、大きな歓声が上がっていた。初めてのメンバーもいたの

宮里和則（みやさとかずのり）

NPO法人「ふれあいの家—おばちゃんち」のおじちゃんとして、品川宿のまちづくりにかかわっている。日本ダンゴムシ協会主宰。

で、私は様子を見ようと近づいていった。するとハンモックに座りながら五年生の女の子が真剣な顔で私に話しかけてきた。

「あの、このハンモックに立つてもいいですか？」

こう尋ねられたら皆さんだったらどう答えるだろうか。ここは自分の責任で自由に遊ぶ公園。ルールをできる限り無くし、子どもたちのやりたい気持ちに応援する場所である。しかし彼女は「その場のルールがわからなければ責任者に聞く」という思いをしつかり持っていたのだろう。ルールは自分ではない誰かが決めるものと考えている。これが彼女の規範意識である。

北浜ことも冒険ひろばによく来ている子どもたちは顔を見合わせていた。私も久しく遊び場のルールを聞かれたことがなかったの、一瞬言葉を失ってしまった。「それは自分で決めていいんだよ」と答えると彼女は「じゃあ、やめます……」とあっさり思いを抑えてしまった。本当は立ってみたかったのだろう。私がいいよと言ったら立ったのだろうか。

今、子どもの周りには責任ある大人ばかりがいる。例えば、子どもが学校や幼稚園で木から落ちた時は、保護者へまず謝罪の電話をしなければならぬ。責任者が目を離していたからということになる。だから責任者が責任を問われないようにルールを決める。木には登ってはいけません。しかし、もし町中で木から落ちた子どもを通りがかかりのおじさんを見つけ、家に送っていったとしたら、保護者はどんな対応をするだろうか。もちろん感謝の気持ちを表すだろう。「ごめんなさい」の関係と「ありがとう」の関係。いつの間にか子どもの周りには「ごめんなさい」の関係ばかりが取り巻いているようになった。

責任のある大人に聞いて許可されれば、いつも安全を保障されているように思えてしまう。しかしこの思いで育ってしまったえば、自分の身を自分で守るといったとても大切な感覚が実は失われてしまう。

自分の責任者はいつの時代も自分。ちよつと考えてみれば「自分の責任で自由に遊ぶ」ことはあたりまえの感覚だったはずである。

穴掘り

日君は泥遊びが大好きだ。穴を掘り、落とし穴。水を入れ、池ができ、やがて川になる。そしていつの間にか頭も顔も服も靴も泥だらけになってしまう。家に帰ればもちろん叱られる。それでも次に来た時もまたドロドロに……。お母さんは譲歩して条件を出す。「泥遊びはいいけど、靴は汚さないでね」

それでもやはり泥だらけ。やがて彼は、自分の靴は自分で洗うようになり、北浜に替えの靴を持ってくるようになった。お母さんの思いと彼の思いのせめぎ合いの中で、彼の規範意識が鍛えられていく。彼の規範意識の主人公は彼自身である。これが本当の規範意識ではないかと私は思う。

大人の規範意識

この公園にいと大人の規範意識も揺さぶられる。北浜こども冒険ひろばは人通りの多い公園である。子どもたちがたき火をしたり泥んこ遊びをしている

場所を、遊び場とは関係のない人たちが始終横切っていく。スーツ姿のビジネスマン。ショッピンバッグを押したおばあさん。ハイヒールのお姉さん。ここは町の人たちの生活道路（抜け道）なのだ。

子どもたちが自由に遊ぶ場所としては制限が多いように思われる。私も当初はそう感じていたが今はそれが魅力の一つなのだと感じるようになった。それは普通では子どもの遊び場に来ないような人たちとも、たくさんの出会いをもたらししてくれたからだ。

ドラム缶風呂の日々

夏。蝉時雨。子どもたちはドラム缶風呂に夢中。毎日風呂たきをやりに訪れる六年生。水着を持ってきてにぎやかに入る子どもたち。まさに北浜が温泉地になってしまふ。普段は公園をただ通り過ぎるだけの人たちも、このドラム缶風呂に引き寄せられるように、近づいてきておしゃべりをしていく。

「懐かしいわね……」「これ熱くないの？……」「「いとも楽しそうなことしているねえ」「おじさんも入り



▲新聞紙なしの火おこし

たいなあ」。みんなすてきな笑顔で子どもたちを見ながら話してくれる。「六十五年前に入りましたよ。この町にも九つぐらいあったんですよ」と普段は無口なおじいさんがうれしそうにこの町の昔を語ってくれることもあった。

ある日のこと、道行く人いつものようにあいさつをしていると、「え、こんなことしていいの？」といぶかしげに近づいてきたおじいさんがいた。「公園で火をたいてもいいの？」そう、通常の公園では禁止されているたき火である。おじいさんの疑問はもつと

もだ。おじいさんは「公園では、たき火をしてはいけない」という規範意識を持っていてる。

「ええ、そうなんですよ。この公園は子どもたちが自分の責任で自由に遊ぶことができる公園を作ろうと区が整備したんです。

子どもたちがたき火もできる公園なんですよ」と話すと、「ああそうだったんだ。いつもここを通っていて不思議に思っていたんだよ」とおじいさんは深くうなずき、火おこしをしている子どもをしげしげと眺めた。これは子どもの理解者を増やすチャンスと感じ、しばらく話し込もうと思った。

「子どもの火遊びで火事になるニュースが多いじゃないですか。それは隠れてやるからなんですよね。大人と子どもが火を挟んで向き合うことがとても大切なんだと思うんですね」「そうだね、大切なことだね。今はどこでもできないからね」と話が進んでいった。にこやかに帰っていくおじいさんの後ろ姿を見ながら、「たき火はダメ」から「大人と一緒に子どもはたき火をするべき」へと規範意識が大きく広がっていったことを感じた。

北浜こども冒険ひろばは人通りが魅力である。町の人の生活のすぐそばに、子どもの遊びがある。そのことで、町の人たちの規範意識が少しずつ、それでも確実に変わっていることを感じる日々である。

私はこう
考える

「規範意識」
って
何だろう？

《解説》

規範意識に至る過程

内藤俊史

(大学教員)

規範意識とは、さまざまなタイプの規則や規範について、それを守るべきであるという意識や心のあり方を意味する。しかし、「規範意識を育てよう」という場合、子どもたちに期待していることは、ただ単に、子どもたちが規範に沿った行動をとることだけではないだろう。また、仮に規範に従おうとする一般的特性が存在するとして、その特性をただ培うことだけでもないと思われる。私たちは、規範に従う行動や規範を守ろうという意識や判断に至るまでの心の過程自体の成長を期待しているのではないだろうか。このように広い視点から規範意識をとらえてみると、さまざまな心の成長が射程に入ってくる。

規範意識は、子どもたち自身が持つ社会的な世界、つまり社会的なやりとりの広がりと共に経験する新たな場の中で成長をする。本稿では、それらの経験において子どもたちが何を獲得するのかを考える上で重要と思われる二つの点を述べたいと思う。

第一は、規範意識の成長には、知識の獲得や感情などの成長がかかわっていることである。

規範意識が生じる時に、どのような心理的な過程や要因がかかわっているのだろうか。発達心理学者ジェイムス・レストは、道徳性を構成する要素として四つの要素を提案したが、それらの要素は、道徳

内藤俊史（ないとうたかし）

お茶の水女子大学大学院教授。著書：『子ども・社会・文化—道徳的なこころの発達—』（サイエンス社）など。子どもや青年の道徳性についての調査、研究を進めています。

的な規範に従う行動に至るまでの典型的な心理的な過程を示唆している。ここでは、それらの要素について手短かに説明をしたい。

a 道徳的感受性 その場面におけるほかの子どもの心の痛みや喜びを知る能力（感受性や共感）。

〔例〕遊びの仲間に入れない子どもがいることに気づき、その子どもの感情を理解する。

b 道徳的判断 その場面における問題を、自分の持つ道徳的原則やさまざまな知識に照らして判断をする。

〔例〕「友達を悲しませてはいけない」という道徳的原則の下で、自分の仲間に入れるのが正しいと判断する。

c 道徳的動機づけ 正しいと判断された行為を実行する義務感やそうしたいという感情を持つこと（道徳的な規範意識）。問題となつている状況における人間関係や集団に対するかわりの感覚、自尊心などを実行への義務感や動機にかかわる。

d 道徳的行動 すべきとされた行動を実行する過程。自分自身の行動を律するための自己制御の能力や意志、効果的に実行するための行動計画の能力。

これらの要素を見ると、「すべきである」という規範意識に至るためには、認知的な能力や感情などの発達がかかわっていることが改めてわかる。例えば、「誰も人がいなくなる部屋では電気を消す」という自然資源に関する規範意識は、電力を生み出すために多く資源が消費されるという知識（認知）によって高まるだろう（b 道徳的判断の要素）。

しかし、認知的な発達を遂げているにもかかわらず規範を逸脱する行動が、今の子どもたちの問題であるとも言われている。規範意識に至るためのほかの要素について検討がさらに求められる——例えば、c 道徳的動機づけに含まれる集団における関与の感覚等々。

第二は、規範や規則のタイプによって規範意識の

成長のために必要な事柄やそのための経験が異なることである。

これまで道徳的規範を念頭に話を進めてきたが、規範意識の対象は、道徳的な規範や規則に限らず、法律や校則などが含まれる。発達心理学者エリオット・トゥリエルは、規則を三つの規則に分類している。まず、**道徳的規則**は、「理由なく相手を傷つけてはならない」などのように普遍的かつ変えることのできないものとされる。**社会慣習的規則**は、「赤信号で止まる」などのように、社会や集団によって異なる可能性があり、また人々が合意すれば変えられるとされる規則である。また、**個人的規則**は、自分が自分に対して課した規則であり、「毎朝六時に体操をする」など、ほかの人に対する強制力を必ずしも持たないような規則である。

この分類に従うと、例えば、個人的規則の場合には、規則を守ることによる結果を知ること、自分は規則を守ることができるという自尊心が規範意識に大きく寄与するに違いない。一方、社会的な取り決

めとしての社会慣習的規則については、みんなが守ることによる安定感、自分がその集団の中で大切な一員であるという感覚が、規範意識につながることは容易に想像できる。

本稿では、子どもたちがさまざまな経験を通して規範意識を育てていく時に何が獲得されているのかを理解するために、二つの点を述べた。子どもたちの規範意識を育てるためには、まず子どもたちのもつ多様な「規範経験」を理解することから始める必要があるのかもしれない。

参考文献

- 1 内藤俊史・奥野佐矢子『レスト・ナルヴァエスによる道徳教育プロジェクト—コールバーグ以降の道徳教育案の二つの方向』道徳と教育 二〇〇二年 No.312-313 pp.124-130

- 2 首藤敏元・チュリエル 日本道徳性心理学研究会編『道徳性心理学—道徳教育のための心理学—』北大路書房 一九九二年 pp.133-144

幼小の豊かなつながりが実現

シリーズ
子どもが
育つ場所を
訪ねて



那覇市立金城幼稚園

日本全国にある「子どもが育つ場所」を幼稚園教員が訪問。自分の目で見て聞いて感じたことをレポートします。

第10回は那覇市立金城幼稚園。沖縄の自然を生かしながら一人ひとりを大切に育み、小学校とのつながりを豊かにつくり出している園を訪ねました。

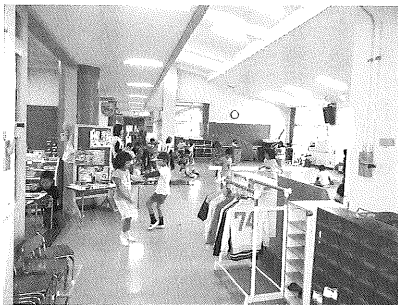


「白い砂の砂場は、水を流し込んでもスーッと浸透して溜まらず、砂を固めてお団子を作ることはできない」という話を、数年前に沖縄の先生から聞いた時から、いつかは行ってみたいと願っていた沖縄の幼稚園。沖縄のイメージである青い空、青い海のもとで育つ子どもたちの生活を見てみたい、という願いが、ようやくかなった。

前日に沖縄入りし、翌朝、国際通りに近い宿泊先からタクシーに乗り、金城幼稚園に向かった。急に降りだしたスコールの中、車は進む。駐屯地を右手に見ながら10分ほど行くと、

教育研究所、高校、中学校が並び、自然豊かな公園の脇を通り、幼稚園に到着。幼稚園の隣には地続きの小学校も併設されていた。

到着するころには小雨になり、十一月下旬にもかかわらず24度という暖かさの



中、園庭にはブーゲンビリア、ペゴニア、インパチェンスなどのきれいな花々が咲いていた。

園舎の入り口で傘をたたんでいると、室内で思い思いの遊びに取り組んでいた子どもたちが集まってきた、「おはようございます」「スリッパどうぞ」とかわいい声を掛け、私たちを出迎えてくれた。

◆安心して思い思いに過ごす場所

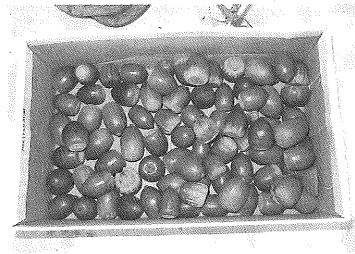
沖繩の公立幼稚園は、一年保育が主体、全園が小学校に併設されている。金城幼稚園は、昭和六十年に開園、四歳児一学級、五歳児三学級、計四学級、一二〇名の構成である。職員室に一番近い場所に四歳児の保育室があり、その隣に五歳児保育室が三つ並んでいる。廊下側には壁がなく、開放的な雰囲気だ。五歳児保育室前には遊戯室の広い空間が広がり、誰でも自由に



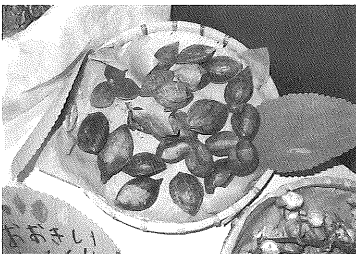
き来していた。自分たちで場を選べること、クラスを超えていろいろな友達の様子や遊びを見たり聞いたり伝えたりできることは、心も体も伸びやかに育まれる大事な経験と思われる。

保育室には、石垣島に住んでいる知り合いが送ってくれたという日本一大きいオキナワウラジオガシやモモタマナの種、月桃の実がすてきに飾られ、季節感が漂っていた。

気温24度、半袖Tシャツ姿で過ごしていても、季節はしっかりと秋。保護者向けのお知らせボードには、フリース生地製の首巻きの作り方が張ってあった。沖繩でも、こうして冬支度が進んでいることが伝わってきた。



▲オキナワウラジオガシ



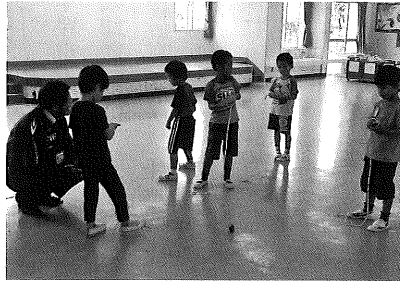
▲モモタマナ・月桃の実

◆ 幼小をつなぐ大切なひと・こと ↳ 園長先生と誕生会

園長先生は小学校校長との兼任だが、毎朝一時間半は園で子どもたちと過ごしているという。

園長先生を見つけると、待ちかねたようにコマを手にした五歳児の子どもたちが集まってきた。真剣な顔でひもを巻き、エイツとコマを投げる。見事にコマが回ると満面の笑みがこぼれる。これがただのコマ回しではない。コマをしっかり回せるようになる。園長先生に見ていただき、園長先生から太鼓判を押されると「my コマ」を頂けるといふ、特別のコマ回しだったのだ。

園児と園長先生の関係が、幼稚園と小学校のつながりの基になっている。それを痛感するエピソード



を主任の村吉先生から聞いた。それは誕生会の日のこと。幼稚園でのセレモニーを終えると、誕生月の年長児は村吉先生と共に園庭を抜けて十数段の階段を降りた所にある小学校へ行き、一年生の授業参観をしたり、給食室での調理の様子を見たりする。六歳になってうれしい気持ちのこの日に、小学生の姿や小学校内を見ることが、小学校生活に安心して近づいていってほしいという願いなのだろう。同時に、園児の姿を小学校の先生たちに知ってもらうことも意識されているとのことだった。

校内を回り、いよいよ最後に校長室を訪れ、そこで園長先生から「爪切り」をプレゼントされる。一歩間違えれば痛い思いもする爪切りではあるが、大きくなることは責任を持つことであり、自分で自分の体を意識し整えることができるようになる年齢になったのだということを感じているのだという。自分を大事にし、人のことも大事にしてほしいという願いが込められているのを感じた。「色の違う爪切りを子どもたちの前に並べると、どの色にするか決

まるまで、いろいろなドラマがあるんですよ」と園長先生は目を細めて話してくれた。

◆ 幼小をつなぐ大切なひと・こと ↳ 五年生との交流

雨が降っていたこの日、子どもたちは八時に登園してから室内で思い思いの遊びに取り組んでいた。十時十五分ごろ、片付けの音が掛かった。五年生が読み聞かせに来る時間になったのだ。

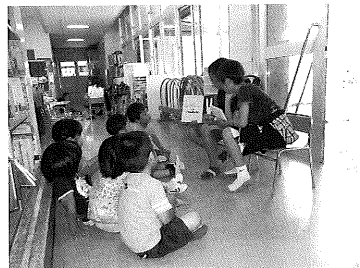
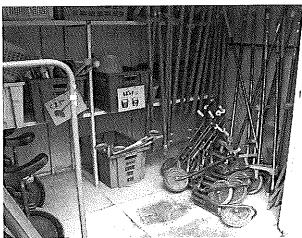
何人かの子どもたちが、戸口で小学校の方を見ている。ワクワク、うれしい気持ちが出来てきた。五年生が一人一冊ずつ絵本を持って、階段を上がり園舎に近づいてくる。「来たよ！」と担任や友達に伝えに行く子、照れたような表情で五年生を迎える子どもなどさまざま。五年生は四つに分かれ、各保育室に入っていく。あいさつを交わした後、五年生二人と園児五、六人がグループになり、いろいろな場所で読み聞かせが始まった。五年生は園児たちの座る位置や高さを意識しながら絵本を持ち、園児の様子

を確かめながら読み進めていた。園児のほうから五年生に声を掛ける姿も見られ、経験が積み重なっていることが感じられた。

五年生が小学校に戻る時に、遊戯室にグループごとに並んだ読み聞かせが終わり、くつろいだ様子でおしゃべりが始まった。五年生に対して、村吉先生が静かに感謝の言葉を伝えた。すると五年生たちは、スツと耳を澄まして聞きた。教師間の幼小のつながりが感じられた場面だった。

◆ 園庭環境に込められた大切な 思い

お弁当の時間、雨が上がった園庭を案内してもらった。園庭には大きな倉庫が二つあり、園庭で使う遊具がきれいに納められていた。





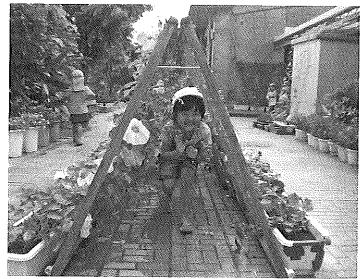
戸外遊びの時は倉庫の扉が開かれ、子どもたちが必要に応じて自由に出し入れしているようだ。

私たちを出迎えてくれたインパチエンスやベゴニアは、二期になって登園時に親子で植えたもの。子どもたちは一学期に

アサガオやヒマワリを育てた喜びを味わった経験があり、率先して世話をしているという。花にまつわる心に残るエピソードを二つ聞いた。

一つ目はヒマワリ。五月、親と離れることに不安のある子どももたくさんいる時期に「ヒマワリのおかあさん、おとうさんになりませんか？」と投げかけ、一人一粒の種をポットに植える。ぐんぐんと生長していくヒマワリに自分の姿を重ねて大切に育てたという。

二つ目はアサガオ。アサガオは上へ上へと伸びる。せっかくなが花が咲いても種がついても、高い所では子どもたちが自由に取って遊びに生かすことはできない



▲アサガオのトンネル（8月撮影）

いと考え、写真のようなものを考案したようだ。こうすることで花や種を自由に取ることができ、アサガオのトンネルをくぐることもできたという。子どもたちの思いに添うような物をそこに置くと、

子どもたちも心地よく受け取り、しっかりと見る、変化を感じる、表現する、などの行為につながっていくのではないかと考えた。

園庭にはまだまだすてきな植物の空間があった。「カレーライス畑」「チョウのおうち」などである。野菜が植えられ、収穫したら調理して食べる。

オオゴマダラチョウが飛んできては卵を産み、それらが孵かえって飛び立っていく。自然に

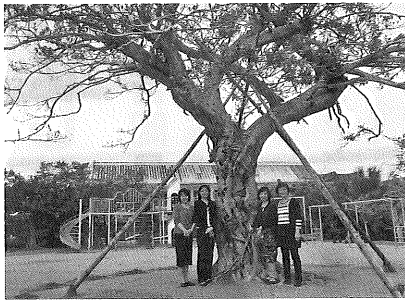


▲チョウのおうち

その行為が行われているように、教師は環境を準備し、幼稚園で暮らす仲間と共に気付いたり、試してみたり、時には挫折したり支え合ったり、ということを経験させているのである。

入園説明会用の冊子に、幼稚園では「遊びを通して子ども自身に気づかせる保育」を行い、多くの体験を通して生まれる子どもの発想や考えを大事に受け止め認めることによって「豊かな心」や「生きる力」を育てると書かれていた。まさにこの園庭で、子どもたちは成長を支えられていることを感じた。

念願の砂場遊びは、あいにくの雨によって見ることができなかった。靴箱には通園で履く靴と共に、砂場遊びで使用する島草履が置いてあった。夏には砂場を深く掘り、ブルーシートを敷き、水をはってブルーにするそうだ。私の園の砂場ではブルーシートを敷かなくても多少は水が溜まる。沖縄の砂



— 訪問メモ —

訪問時期：2012年11月
訪問場所：那覇市立金城幼稚園
〔住所〕 那覇市金城4-3-1
〔電話〕 098-858-6188
<http://www.nahaken-okn.ed.jp/kanag-kg/>

と東京の砂の違いを思い浮かべていた。園長先生や村吉先生の話の聞いてみると、園児のために、園児を育む家庭のためにという、凛とした教育観がそこに散りばめられていることを感じた。子どもを育てる場所であれば必然のことであるが、大事な理念と実践をこれからも共に発信し続けていきたいと願っている。

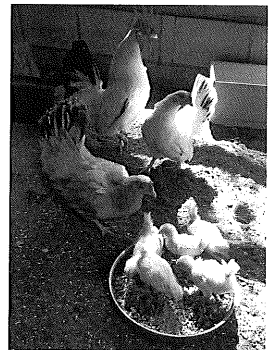
訪問者／伊集院・佐藤・高橋・宮里

文／高橋陽子（お茶の水女子大学附属幼稚園）

チャボが育ててくれました

吉岡晶子

(幼稚園教諭)



やりたくないな

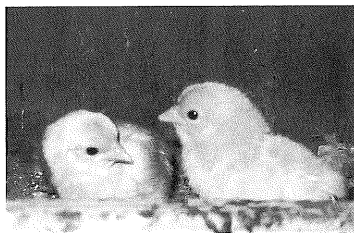
ある冬の日の朝、生きものがかりの一人が「いやだな……」とぼつりとつぶやきました。私は「そうなのね。寒いし、臭いし」と言うと、「うん」。生きものがかりのほかのメンバーにもうなずいている人がいました。私も気持ちはわかります。「でもね、待っていると思う」と言うと、「じゃあ行くか」と言っ
て鳥小屋に向かいました。鍵を外して扉を開けると、A夫が「あ、ほんとだ。待ってたー」と驚きの大きな声。みんなも見に行き、「並んで待ってたー」「こっち見てる」と感動の声。本当に五羽のチャボが、

入り口に並んで首を伸ばして見上げていました。私もびっくり。チャボがしゃべれるとしたら「おはよう、待ってましたよ。早く何かちょうだい」と言わんばかり。おなかがすいているのね、遅くなつてごめんね、という気持ちになり、このタイミングで出迎えてくれたチャボに感謝の気持ちでいっぱいになりました。

その日の生きものがかりは張り切つて野菜を刻み、お水を取り替え、小屋の中の砂をそれはそれははいねいにふるつてお世話をしたことは言うまでもありません。

ひよこ誕生

本園（お茶の水女子大学附属幼稚園）ではここ数年、チャボが子どもたちの仲間になっています。昨年の夏休みにはヒナが五羽生まれました。お母さんチャボの下に小さなひよこが



隠れているのを見つけた時には、お世話に来ていた子どもたちと驚き感動し、かわいらしくていとoshくてたまりませんでした。子どもたちには、暑中お見舞いの葉書に写真を載せて朗報を伝えました。

お父さん、お母さんチャボと五羽のひよこ、全部で八羽のチャボが鳥小屋で暮らし始めました。五羽のひよこ全員が無事に育つかどうか心配でしたが、すくすくと育ち、二学期に子どもたちとご対面となりました。早々に、教師のほうからこのチャボ家族をこれからどうするか相談をもちかけ、みんなでお

世話をしようということになったのです。お世話を
する人を「生きものがかり」と命名しました。この
名前は教師のリクエストでもあり、子どもたちも耳
慣れた名前なので賛成してくれました。そして六人
一チームで毎日交代してお世話をすることになりま
した。

そのころの生きものがかりは毎日大張り切り。ひ
よこに会いたい触りたい一心だったのでしよう、登
園するとすぐに鳥小屋に集まり、キャベツを細かく
したりお水を替えたりしました。もちろん個人差が
あり、「僕は鶏が苦手なんだ」と、ひたすら餌を用意
する人、遊び相手に専念
する人、とかかわり方は
さまざまです。ボランテ
ィアの生きものがかりも
参加し、鳥小屋は子ども
たちでにぎわい、ひよこ
たちはみんなのアイドル



になり、愛情に囲まれていました。チャボについて詳しくなった人、抱き方のスペシャリストなどなど、チャボ博士が増えてきました。

継続期

数か月続けていると、状況が少し変わってきました。飼育活動ではよくあることだと思えますが、なかなかメンバーが集まらなかつたり、さつさとお世話を済ませるけれども中途半端になっていたりする日も増えてきました。

お弁当を食べながら「ほんとはいやなんだ……」「だってさ、遊びたいし」と打ち明けた人や、家庭でぼやいていた人もいて、「それでもお世話してたの?」と聞くと「うん」という答えが返ってきたこともありました。やってあげたい、やりたいからや



る、という時期を越えて「ねばならぬ感」で頑張った人もいるようです。小さくてかわいらしかったチャボも大きくなって突ついたりするし、抱きにくくなったりしてきたことも影響していたのでしょうか。

このような子どもたちの声は、生きものとの向き合い方、かかわり方を考える大事な時期になってきたことの表れであり、本音を口にしてくれてよかつたと思いました。順番だから仕方がない、義務感、そのような思いでお世話をしていると、「やりたくないな」という気持ち相手が伝わることでしょ。それを乗り越えて、単に仕事としてではなく、もう少し気持ちを掛けて携わってほしいと思えました。

そのような声がちらほら聞こえてきたころのやりとりが前述冒頭の場面です。本当に自分たちを待っていたんだと実感したあの日のメンバーは、チャボの気持ちに気付き、「やらなくては」と思ったことでしょ。やりたくてやる、仕事だからやるというのではなく、必要とされている、という気持ち、自覚になったと思えました。

転換期・使命感

数日後、お帰り前に集まっている時、何人かがチャボのことを話題にしていました。やはりあまり前向きではないような雰囲気でした。「でも、待っているのよね」と言うと、先日の生きものがかりの一員だったB子が「そうだよ。チャボは本当に待っているよ。入り口で」ときっぱり自信ありげに言いました。私も「そうよね」と相づちを打つと、「えっ、私の時にはいなかったよ」という声も聞こえてきました。「奥の方にいた」「出てこなかった」「上（高い所の棚の上）に乗ってたこともあるよ」など口々に言っていました。

その時、「でもね、キャベツのお皿を置いたらみんな集まってきたよ！」というC夫の大きな声。「餌（配合飼料）をあげた時も」という声も。私が「ということは何？」と言葉を続けると、「おなががすいてる」と大勢の子どもたちから返事が返ってきました。チ

ャボはおなかをすかせている、食べさせてあげなくちゃ、チャボは待っているということを実感したようでした。大げさかもしれませんが、自分たちが生命を支えているという使命感を感じたような気がします。

するとD夫の「先生、お部屋にも生きものがかりの印、付けようよ」と前向きな意見です（生きものがかりの順番表は廊下に掲示してある）。「そうね、そうしよう」と印になるものを探していると、またD夫が「黄色がいいよ」と発言。それを受けて「この黄色のマグネットでどうかしら」と見せると、「いいね」とみんなが同意してくれました。翌日の生きものがかりのチームメンバー表に黄色のマグネットを印を付けました。この時には、クラスみんながチャボへの思い、生きものがかりの意識を新たにしようでした。もちろん内心複雑な人がいたかもしれませんが、それも当然のこと。生きものに対しては得手不得手がありますから。

再出発

別のチームの日のことです。朝すぐにメンバーが集まりお世話が始まっています。チャボを触るのは苦手なE夫も、恐る恐る抱き上げようとしたり、メンバーがそろっているか確認したりして、やる気が感じられました。そしてE夫は「F子ちゃんがない」と言って探しに行きました。でも、F子は竹馬をやっている時だったので、「あんまりやりたくないの」と消極的でした。この声もごく自然な気持ちの表れでしょう。でも、チームの一人が「F子ちゃん、この前言ってたでしょう。忘れたの?」と、先日のやりとりのことを思い出させてくれました。仲間の後押しされて小屋に入ったF子は、まだほんのり温かい卵を手にして満面の笑みを浮かべ、その後はせせせとお世話に励んでいました。楽しくお世話を済ませた子どもたちはチャボを外に連れ出して「ふれあいどうぶつコーナー」の看板を掲げ、年少さんたちにも触らせてあげていました。生きものが

かりがステップアップしたようです。

また、別の生きものがかりの日にも変化を感じました。これまでお世話にあまり積極的でなかったG夫が朝早く鳥小屋をのぞき込んでいました。メンバーが集まるのを待っていたようです。「お友達を呼んでくる?」と声を掛けると、走って仲間を探しに行きました。口下手なG夫は自分の気持ちや考えていることを表現するのが苦手ですが、この様子からは、チャボへの思いと、仲間と一緒にやるんだという気持ちがあることが伝わりました。



これまでも当番活動や役割を担うことはさまざまな形で取り組んできました。取り組み始めは張り切っているのにだんだん要領が良くなったりルーティーン化して、これでよいのかな……と考えてしま

うことはたびたびありました。数か月チャボと暮らす中では、家族間で争ってチャボがけがをしたり、大家族には家が手狭なのでほかの幼稚園に里子に出したりといろいろな出来事がありました。日々の地味なかかわりを継続することこそ生きものと一緒に暮らすことの基本。チャボとのかかわりは長期間にわたり毎日続けてきましたが、担任にとつては毎日でも、子どもたち一人ひとりにとつては毎日ではありません。交代して取り組む中でモチベーションを保つこと、思いを継続することは結構難しいことなのだろうと思われました。

役割意識にもう一つ「必要とされている」「求められている」という意識が加わったようです。もちろん全員がそろってそう思うようになったのではないかもしれませんが、世話をしている時の雰囲気、空気が変わりました。「あーあ、いやだな……」と思うたこと、つまずきや戸惑いに向き合ったからこそ意識が変わったのではないのでしょうか。

ある日、卵が三個産まれていました。見つけたメンバーは大喜びでみんなが見える場所に置き、「ひよこがうまれるかもしれません」というポスターを書きました。飾ってしまつては生まれませんが、これまでにも卵は産まれていきましたが、もつとあつさり受けとめていました。子どもたちの気持ちが見えているような気がして、夏の感動の日と重なって見えました。

時間はかかりましたが、いろいろなことを気付かせて、私たちが育ててくれたチャボに感謝です。チャボが話せたら何と云うのでしょうか。話せないからこそ、わかつてあげなくては、よく見てあげなくてはという気持ちにさせてくれたのでしょうか。



子どもたちの「^①現在^②」を考える

「いま子どもである人」にとつての
「少子化」とは？

本田和子

(児童学者)

「大人」の語る「少子化」

子どもの数が減り続ける。出生率を示す線グラフに上昇の気配が見られず、人口動態上の未成年者人口は、その割合を下げ続けて止まることを忘れたかのよう……。

ことを教育の分野に限って見ても、小中学校の閉校や統合の話題と、廃校になった校舎の寒々とした映像が、テレビ画面などに大写しにされる。現象は過疎の農漁村に限られず、かつてベッドタウンと呼ばれて、若い夫婦と子どもたちの歓声であふれ返った郊外都市にまで及ぼうとしている。

こうした動きが、私ども大人を脅かすのは、将来に対する漠とした不安である。労働人口は激減するであろうし、それに伴う税収の低下も不可避であろう。結果としての国力の低下。一体、この国の未来はどうなるというのか。

本田和子 (ほんだますこ)
児童学者。お茶の水女子大学前学長、名譽教授。
『異文化として子ども』『子ども100年のエッセイ』
『それでも子どもは減っていく』など著書多数。

しかし、これら耳にかまびすしい「少子化」への憂いは、すべて「いま大人である人」によって語られている。「暗い未来」もまた、彼らの描く未来像にはかならない。ならば、「少子化」は、「いま子どもである人」にとって、どんな意味を持ち、どのような状況として把握されているのだろうか。

「いま子どもである人」にとって「子どもは少ない」か、否か

子どもたちに「少子化」の及ぼす負の影響は、一般に、次のように語られることが多い。すなわち、「同世代仲間の乏しさ」「大人に囲まれて育つことのマイナス面」、結果としての「子どもらしさの喪失」などである。

しかし、「いま子どもである人たち」は、多くの子ども仲間にもまれて、「ガヤガヤワイワイ」と過ごした経験を持たず、「喪失した」とされる「子どもらしさ」なるものも知らない。一昔前と比較するすべを持った「大人たち」の苦々しい視線とは無縁に、彼らは「彼らとして」の子ども時代を過ごしているはずである。彼らの言動は、「いま子どもである人」の言動として、「子どもらしい」としか言いようがないではないか。

彼らが、子ども仲間にもまれて大人から影響を受けやすく、大人から学習するものが多くいことに関して、彼らには何の責任もなく、また、それを負因とのみ数え立てるべきではないだろう。子どもが、人として成長していく過程で、生まれさせられたその社会が既に獲得している「文化のかたち」を、トラブルなく身につけていくことも、避け難い必須の課題であり、「文化型の習得」に関しては身近な大人たちの言動がモデルになる

とは周知の言説である。大人に囲まれて育つことは、「文化型の学習」には極めて有利な状況なのである。現在のこの国に生まれた子どもたちは、水道の使い方も、電気器具への対応も、果ては新種の通信器機とのつき合い方までも、格別の困難もなく身につけていくだろう。

文明度の高い社会に生まれ育つ子どもたちは、一昔前の村落共同体で育つ人たちのように、自然児であることも、仲間と群れて遊びつつ生き方を学んでいくことも許されない代わりに、大人たちから多くを学んで、「この社会文化の中で」巧みに生きていく技術を、無理なく獲得していくに違いない。

子ども自身、「少なく生まれさせられた」彼らにとって、「少子化」という現状に格別の意味はない。大人たちが暗く深刻に話題とするこのことも、子どもたちにとってはあたりまえの日常であり、「そんな日常の中」で、彼らの日々は紡ぎ続けられていくのである。

保育施設という「いま」の日常」

わが国の場合、就学前児のおおよそ九割を超える子どもたちが、「保育施設」で成長の機会を持っているとされる。「子どものいない家庭」と「子どもだけがいる施設」と、この二者の往還が彼らの日常なのである。幼稚園にしろ、保育所にせよ、それは、同年齢の子どもたちが集められ、「子ども中心」のスケジュールで暮らすように設計された、「人為的・制度的」な時空間である。両者の間に横たわる懸隔は必ずしも小さくはない。




施設入所は、子どもにとって未知の新しい経験であるとは、従来から言い古されてきたことがらに過ぎない。そして、保育者たちは、「家庭」と「保育施設」間のギャップに戸惑う子どもたちを、いかに支援しようかと、さまざまに工夫を凝らしてきたはずである。それら過去の工夫の最たるものが、家庭的雰囲気を保ちつつ緩やかに子どもの適応を促すということであった。

しかし、従来の多子社会の子どもたちには兄弟があつたし、近所には遊び仲間もいたはずである。にもかかわらず、施設への入園は、「未経験の世界との出会い」と考えられ、慎重にきめ細かに扱われてきた。とすれば、子どもの減少は、両者間のギャップを、従来にまして大きく深刻なものとするはずである。にもかかわらず、子どもたちは、入園時に極端な不適應を示すこともなく、保育者たちにも格別の困難事とはされていない。彼らは、同世代の仲間の少ない暮らしを通して、異質の集団と共存するすべを身につけてしまったのだろうか。

このことは、彼らを支援する大人たちにとつても、より新しい認識事項であろう。人口減少下の社会では、労働力の補填、社会的活力の維持、あるいは固有の文化の敷延など、いずれをとつても、国や人種を異にする人たちとの共働が不可欠だからである。

「家庭」と「保育施設」というこの異質の二者間を、子どもらとその異質性を感受しつつ往還することは、彼らにとって意義深いものであろうし、保育者にとつても、その重要性が認識されるべきと思うからである。

からだ考

食べる 
つながる 
育つ 

子どもにおやつを届ける

伊東奈那

(学生)

お茶の水女子大学公認サークル「オチャス」は、二〇〇六年に食物栄養学科が立ち上げた、食と栄養に関する活動団体です。現在では、約九〇名のメンバーが所属し、さまざまな活動を行っています。

私は、お茶の水女子大学生活科学部食物栄養学科に入学した一年生の時から「オチャス」に所属し、大学附属いずみナーサリーで三年間、ボランティアをしてきました。ボランティアでは、週に一度のおやつ作りをはじめ、新しいおやつを試作・レシピの作成、毎月のおやつだよりの作成、ひな祭りやクリスマスなどのイベントの計画・実施、という活動を

行ってきました。ここでは、おやつ作りを通して学んだ五つのポイントと、季節のイベントについてご紹介したいと思います。

【おやつ作りの五つのポイント】

- 1 安全で安心なおやつ
- 2 食べやすい大きさ・軟らかさ
- 3 食材本来の味を生かして、薄味に
- 4 見た目で楽しめるおやつ
- 5 アレルギーを持つ子どもでも食べられるおやつ

伊東奈那(いとうなな)

お茶の水女子大学生活科学部食物栄養学科 4年

おやつ作りの五つのポイント

幼児期のおやつは、三食の食事ではまかない切れない栄養を摂るための、一つの食事としての役割があります。そのため、おやつを食べたことで夕食が食べられなくなるということがないように考える必要があります。ナーサリーのおやつは手作りで、食材の味を生かした自然な味を楽しめるように、薄味にしています。私たちもおやつレシピを考える上で、ナーサリーの先生方から教えていただいたポイントを盛り込みながら、新おやつのアイデアを考えていました。ここで主なポイントを五つご紹介したいと思います。

まず一つ目は、「安全で安心なおやつ」です。管理栄養士や食品衛生管理者の先生方のもと、おやつ作りを行っています。おやつ作りを担当する人は毎月検便を提出し、体調が悪い時は担当しません。また、キッチンに入る前の身だしなみチェックなど基本的なことから検査の保存まで、衛生管理チェック表に

基づき実施しています。

二つ目は、「食べやすい大きさ・軟らかさ」です。コロコロしていて小さいものは、誤つてのどに詰まらせてしまう危険があります。また、硬過ぎるものは食べにくく、食が進まない原因になります。おやつレシピの中に、『きなこポーロ』といって、小さくコロコロしたクッキーがありました。しかし、「のどに詰まらせてしまいそうで怖い、硬くて不人気」という意見がありました。私たちはその意見をもとに、形を大きめの楕円形にし、硬さも軟らかく改良しました。今ではナーサリーで人気のおやつの一つとなっています。

三つ目は、先程も示した通り、「食材本来の味を生かして、薄味に」です。砂糖の甘さや食塩の塩味を強くしないことで、その食材がどのような味なのかを舌で感じ取ることができます。特にナーサリーのおやつでは、野菜や果物を使用するようにしています。野菜や果物を使うことで、不足しがちな栄養素を補うことができます。また、彩りも良くなります。

四つ目は、「見た目で楽しめるおやつ」です。目を使って、見た目を楽しむことで、子どもはうれしくなり、苦手なものでも食べられることもあります。ホットケーキやクッキーでは、ハートや星型に型抜きをしたり、季節のイベントのおやつでも子どもが見た目で楽しめるようなおやつを心掛けました。

そして五つ目は、「アレルギーを持つ子どもでも食べられるおやつ」です。幼児期では食物アレルギーを持つ子どもが多く、ナーサリーでも何人か食物アレルギーを持つ子どもがいます。特に季節のイベントのおやつについては、みんなが楽しんで食べられるように、アレルギー食品を使わないおやつを考えていました。

このポイントのほかにも、簡単に作れるものにして、家庭でも作っていただけるようなレシピにしたりなど、工夫点は多くあります。活動を通して、「おやつを子どもたちに届ける」という意識が高まり、より良くするためのさまざまな工夫を考えることにつながりました。

季節のイベント

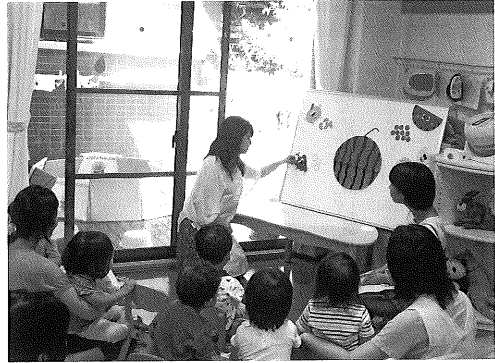
活動の中で力を入れていたことの一つに季節のイベントがあります。ひな祭り、七夕、八月のスイカ、ハロウィーン、クリスマスなどさまざまなイベントを行いました。今回は八月に人気のスイカパーティーについてご紹介したいと思います。

このパーティーで出すおやつは、スイカを丸ごと使ったフルーツポンチです。スイカを切って実を丸くくり抜き、皮の部分は器にします。スイカの器に、くり抜いたスイカと、そのほかにバナナやミカン、ブドウなどの果物も入れて缶詰のシロップをかけて完成です。スイカを器に使用しているので、見た目もかわいく華やかです。

このフルーツポンチを提供する前に、パネルシアターも行いました。登場するのはスイカなどの果物で、子どもたちに果物の名前を聞いたり、一緒に歌を歌ったりしながら、フルーツポンチを完成させ、最後には出来た本物のフルーツポンチが出てくる、

という流れで行いました。パネルシアターの時から子どもたちはわくわくしており、本物が出てくると歓声が上がっていました。

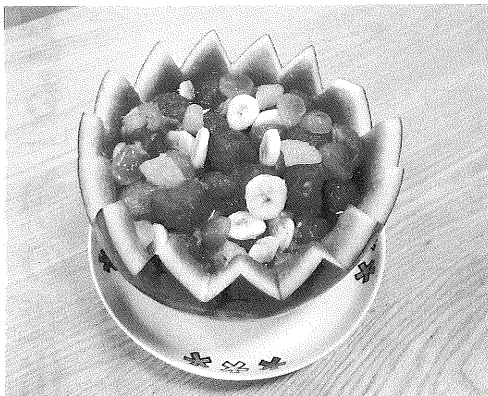
パネルシアターで実際に入っている果物を登場させたことで、食べている時も「これスイカー」「バナナも入ってる」というように、その果物が何であるのか、どんな味であるのかを確かめながら食べることもつなげることができました。食べるだけでなく、その前にパネルシアターをしたり、食材を見たり、触ったり、たいて音を聞いたりすること、子どもたちの印象に残る良い取り組みになったと思います。何よりも、「おいしい」と言ってくれたり、



▲パネルシアターの様子

イベントで楽しそうに、にこにこしている姿がとても心に残っています。

三年間ナーサリーで活動してきて、栄養面に加えて、五感を使うことも、子どもにとって大切だということを実感しました。多くのことを学ばせていただいたナーサリーの先生方に、感謝申し上げます。



▲フルーツポンチ

子ども学探訪

編輯顧問

倉橋惣三

と

キンダーブック

⑥

昭和初期の「よいこども」観の変化

浜口順子

(大学教員)

二つの「よいこども」

「よい子供」(第四輯第十二編 一九三三(昭和七)年三月)

「ヨイコドモ」(第十輯第二編 一九三七(昭和十二)年四月)

昭和七(一九三二)年と昭和十二(一九三七)年に、「よいこども」と



▲画像1 「よい子供」(昭和7年)表紙

昭和七(一九三二)年と昭和十二(一九三七)年に、「よいこども」というテーマを共通に持つキンダーブックが作られている(それぞれの表紙は、画像1・画像2)。昭和初期、わずか五年の間隔を経て、同じテーマで取り上げられた二つのキンダーブックを比較すると、その時代の激動ぶりを映し出すように、内容の変化が見受けられる。

キンダーブック創刊(昭和二年)後、十年の



▲画像2 「ヨイコドモ」(昭和12年)表紙

浜口順子(はまぐちじゆんこ)
お茶の水女子大学大学院教授。

間に発行された一一五編の中で、二回同じテーマが扱われたことは、「よいこども」以外にも、「犬」「お人形」「電気」「水」「動物」「草花」「くだもの」「おもちゃ」「野菜」などがある。どれも当時の子ども達の生活に身近なものだ。子どもたちにとって「犬」は、今よりも身近な存在だったようで、「よいこども」の号の中にも、ちよこんとあたりまえのように犬がいることが多い。

子どもの日常の姿から、

「あるべき」子どもの姿へ

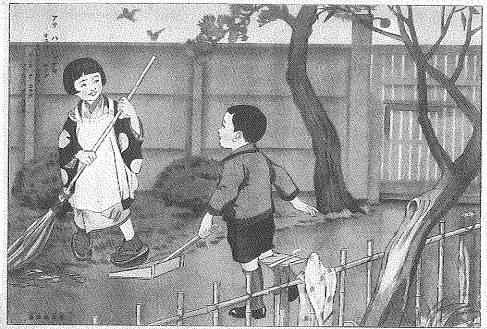
二つの「よいこども」の内容を比較すると(表1)、横長版の昭和七年のものは、縦長版の昭和十二年のものに比べて、全体に、子どもへのまなざしにのどかさを感じる。昭和十年ごろを境に日本全体が戦時体制へと移行するその前夜であることを思わせる。同じ「早起き」を主題とするページを比較してみよう。

昭和7年「よい子供」(横長)	昭和12年「ヨイコドモ」(縦長)
表紙(3人の子どもがジャンケン)(画像1)	表紙(動物をかわいがる)(画像2)
朝は早起き(画像3)	早起き(画像4)
私の譲さん(メルヘン)	ラジオ体操
幼稚園へ(玄関口の様子)(画像5)	お使い(買い物をしてお母さんを手伝う)
元気な子ども(雪だるまを作る)(画像8)	お話(幼稚園で花さか爺さんを聞く)
ご順に願います(駅のプラットフォーム)	お相撲と縄跳び(画像9)
ある日(公園の水道の栓を閉める)	行っていらっしゃい(画像6)
おままごと	子守り(画像7)
交通整理(信号を守り、車に注意)	草取りと水やり
犬の迷子(拾った犬を正直に交番へ届ける)	兄と弟(幼い弟と一緒に遊んでやる兄)
壊れた兵隊(友達への思いやり)	お手伝い
みんなで作ったおうち(幼稚園の大型積み木でおうちを作る)	かわいい大将(徳川家康が幼少時、戦ごっこで弱いほうに味方する逸話)
お誕生日(幼稚園でのお誕生会)	お客様(家への来客を子どもがもてなす)
往来(道で遊ぶのは迷惑。けがのもと)	思いやり(泣く年下の子へ人形を譲る)
よい子ども(画像 最終)	塗り上げ(画像10)
	おててを取って(祖母に手を貸す)
	仲良く遊びましょう(自宅の子ども部屋)

▲表1 昭和7年・昭和12年の「よいこども」編の内容比較



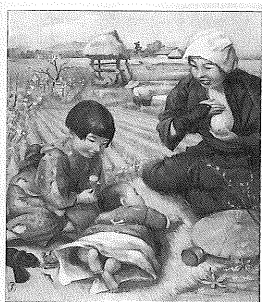
▲画像5「ヨウチエンへ」(昭和7年)



▲画像3「アサハハヤオキ」(昭和7年)

昭和七年のほうは、姉弟が庭掃除をしている図(画像3)で、お手伝いしていることが板に付いた「よいこ」に見える。昭和十二年のほうは、海岸で大きく深呼吸する三人きょうだいの姿(犬もいる！画像4)。朝焼けの空に向かい、両手を開き、胸いっぱい深呼吸する兄、それに従う妹、それをまねするように見上げる小さい弟(そして海を見やる犬)。昭和七年のものに比べると、健康な体をつくり、朝日を仰ぐ、「あるべき」子どもの姿なのだ。

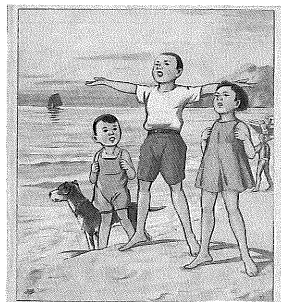
玄関口でお出かけのあいさつをする図も、両方の巻に共通している。昭和七年のものは、ランドセルを背負った(その家の娘を迎えに来たらしい)短におかっぱの女の子が、帽子を手に、優しくほほ笑む母親にあいさつをしている(画像5)。主題は「幼稚園へ」。当時、幼稚園に行くのにランドセルを背負うこともあったのか。一方、昭和十二



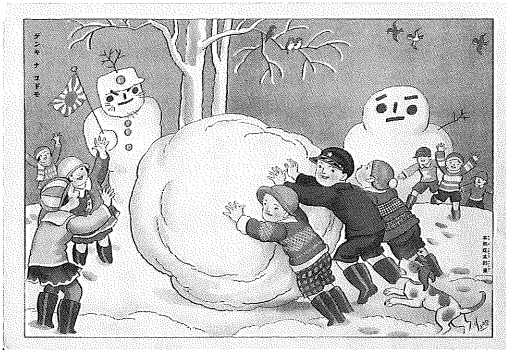
▲画像7「コモリ」(昭和12年)



▲画像6「イッテイラッシャイ」(昭和12年)

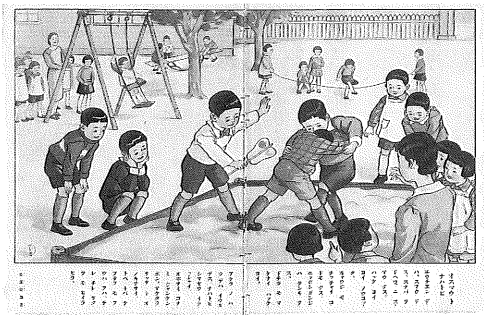


▲画像4「ハヤオキ」(昭和12年)



▲画像8「ゲンキ ナ コドモ」(昭和7年)

庭でままごとをしたりする姿は日常的な光景で、男女が合いまじって(犬も登場)、楽しそうに遊んでいる。それに比べ、昭和十二年版では、園庭で男児たちがお相撲、女児たちは縄跳びをしている(画像9)。男女が別々で、遊びの内容も、強くしなやかな体を鍛えさせようと願う大人の子どもも観が感じられる。全体に昭和十二年の巻ではどうしても、「こういう子どもであらねばならない」という大人のまなざしが印象に刻まれる。



▲画像9「オスモウ ト ナワトビ」(見開き2ページ)
(昭和12年)

年のほうは、出勤する父親と学校に行く男の子を、母親と妹たち、そして女中さんがひざをついて見送る図だ(画像6)。「社会という前線に出かける男性」と「家(銃後)を守る女性たち」という対の構図を暗示しているように見える。また、それに続くページ(画像7)とのコントラストが印象的だ。野良仕事の合間に赤子に乳をやる母親と、その赤子のお守りをする姉らしき女の子。女のあらわな大きな乳房と、背景の農村の風景、しかも梅とタンポポの咲く早春である。自然豊かでプロダクティブな国土の底力を誇らしげに示されているように感じる。

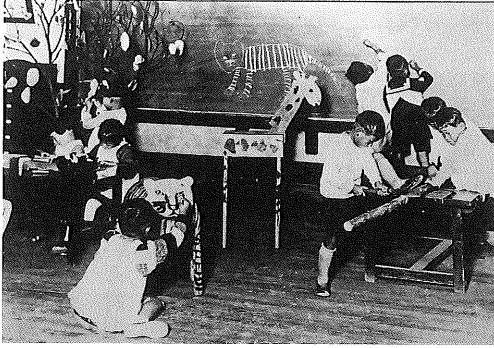
子どもの楽しく遊ぶ姿はどうだろう。昭和七年版にある、雪だるまを作ったり(画像8)、

倉橋のこだわり

昭和十二年版のほうで異彩を放ち、見る者に迫ってくるのが、「塗り上げ」という主題のページである(画像10)。女の子が一心にキリンを製作している。「キリンのお首はなあがいね。どこから下ぬりしましょうか。……おめめをかいたらいきってきた。本気でかいたらいきってきた。」という文章が添えられている。



▲画像10「ヌリアケ」
(昭和12年)



▲画像11

真で、「動物園」を務めていた東京女子高等師範学校附属幼稚園の写がある(画像11、お茶の水女子大学附属幼稚園所蔵)。そこに写っている机や黒板が、「塗り上げ」の絵の中のものとよく似ている。倉橋は著書『幼稚園真諦』(昭和九年)において、「幼児のあるがままの生活」が幼稚園の基盤にあると論じているが、この号は、「あるべき」生活のほうに傾いている。だからこそ、この迫力ある製作風景を入れることに倉橋はこだわったのではないか。

この号の附録『ツバメノオウチ』に、倉橋は自著『幼稚園雑草』(大正十五年)より「本真剣」の章を採録している。「本真剣は我等が子どもに向って望むところであると共に、子どもが自然にそなえている特性の一つである。子どもの心は、一時一事、一時一我

がその特性である。ちよつとでも面白いことがあれば、すぐ他事一切を忘れる。興味の向うところ直ちに全我をその中に没入して、躊躇し遅疑するところがない。これが子どもの本性である。」と言う。

倉橋の「良い子ども」論

『ツバメノオウチ』は、キンダーブックの第五輯第一編（昭和七年）から付いた附録冊子の名前だ。版は、ペラペラのA3版の紙を二つ折りにした色刷り版のこともあるし、この『幼児の教育』誌のような小冊子体裁のものもある。編輯顧問はじめ有識者の解説、お話の題材や保育関連情報が載っている。残念ながら、散逸している号も少なくない。

昭和十二年の「ヨイコドモ」編の『ツバメノオウチ』（九—四号）には、倉橋惣三の「良い子ども」の解説が載っているので左に転載しておく。

「良い子ども」

倉橋惣三

○
良い子どもとは特別の子どもではない。どこにでもいる子どもである。その意味で、このキンダーブックを見ている子どもは、みんな良い子どもである。

良い子どもというと、何かこう特別な、大人の中でいう聖人とか仙人とか、めったにないもののように思うことは、一般の子どもをよくない子どもときめているのである。これは、何という変な考え方であろう。

考え方として変である位であるから、子どもの方にとって、さらにどの位変な思いをさせられることであろう。

「良い子におなり」

それはよく分っているが、そういう言葉の裏に、お前は良くない子だというような意味がこもっているのが、どうも変であり、どうも気に入らないであろう。

「良くない子達よ。良い子におなり」

これは、なるほど、心もちが悪い。

○

良い子だって、時には良くないこともする。しかし、それですぐ良くない子になる訳ではない。それで

「良い子よ、良くないことをするな」といわれるが、それが親切な注意であると共に

「良い子よ、よいことをせよ」

こそ、最も愉快な忠告である。

そこで、この巻を見せるにも、どうぞ、そういう心構えでいて頂きたい。

「さあさあ、良くない子達。これを「覽」

という風でなく、

「この中に、良い子がいるでしようか」

なんて、妙にからんだ言い方なんかしないで、「よくあつさりと、何気なく（わざと何気ない顔をするのでなく）さらにねがわくは、そこに集まっている子が、みんな良い子である



▲「ヨイコドモ」(昭和7年)

ここの堅き信念の下に、この絵を見せるんですね。

「あつ、ここに僕がいちあ」

も少々言い過ぎるかも知れないが、ほんとうにそう思う子だって、必ずしも少なくはないはずである。少なくとも

「僕も良い子だ、良いことをしよう」

と思わせるのが、こくこく自然のことである。

この絵の中には、普通の子どものすること以外のことは一つもないはずである。いわんや、普通には出来難いようなことは一つもないはずである。

それは、この巻が修身の教科書でないからである。良い子、どこにでもいる良い子、というよりも、すべての子どもの良い場面の観察絵本だからである。

だから、これらの絵を見る子ども達は、格別感心したり、世にも稀な美談集だぞと思うことはない。それよりも、ただ心もちがよいであろう。うれしいであろう。一つ一つの絵の中に、少なくともどれかの絵の中に、自分の確かに持っている一面を感じて、愉快にたえないであろう。

おかあさん方も、幼稚園の先生方も、そういう子ども達の心もちを、決して邪魔しないようにして下さい。くれぐれも修身絵本でなく、観察絵本なのでから。

— 続く — (引用文の旧字・旧かなづかい等は一部書き直してあります。)

報告

「実践を通して表現の源を考える」

ハーフミラー・附属幼稚園・いずみナーサリ

第七回 お茶の水女子大学ECCCEL子ども学シンポジウム(二〇二二年十二月)から

刑部育子(大学教員)・ハーフミラーグループ
伊集院理子(幼稚園教諭)・中澤智子(保育所保育士)

お茶の水女子大学ECCCELは「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築」の略称で、乳幼児、学生、社会人が共に学び自らの成長を探索する場の創造を目指しています。今回の子ども学シンポジウムでは、日ごろお茶の水女子大学ECCCELにかかわり、「表現」について考え、実践している人たち(ハーフミラー、附属幼稚園、いずみナーサリ、大学教員)が参加者と共に「表現の源」に迫る対話を行いたいと提案されました。

まず、ハーフミラーについて少し説明をしておきます。本学附属学校では、アートを専門としている

附属学校の教員たちが中心となって夏休みに「ハーフミラー」という作品展を毎年開いてきました。このハーフミラーという場合は、作品を鑑賞する場というだけでなく、日常の教師と子どもとの関係が出会い直される特別な場となっています。教師と子どもは、学校では教えー教えられる関係ですが、ハーフミラーでは教師がアート作品を鑑賞に来た人たちをもてなすという、いつもとは異なる関係で出会う場です。さらに、大学の幼・小の教職科目の一つである「保育表現」で行われた大学生の作品もハーフミラーに出されるなど、表現をめぐる学内の人たちの有機的

な学びの循環がつくり出されています。

一方、附属幼稚園やいずみナーサリーでは、子どもの表現を大切に日々、保育を行っています。ECC CELLが目指しているように、校種を超えて共に学び合い探求する場がシンポジウムを通して創造できるのではないかと考え、「実践を通して表現の源を考える」シンポジウムが企画されました。

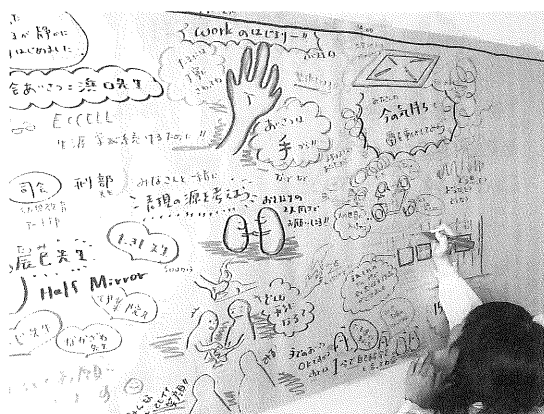
シンポジウムは三部構成としました。第一部はハーフミラーにかかわる人たちが行うミニワークショップ、第二部は附属幼稚園、いずみナーサリーによる実践事例の報告、第三部は参加者と共に「表現の源」に迫る対話的なトークセッションです。

スクライバーの紹介

本シンポジウムでは、従来のシンポジウムの形、与える側―受け取る側の一方向的な関係を見直し、誰もが自発的に参加し、協同して新たな意味を生成していく過程を大切にしたいと考え、「スクライバー^{注1}」という特別な記録者に入っていたく新たな試

みを取り入れました。

スクライバーとはその場の状況や聞き取った内容を即座に把握し、図を織り交ぜながら次々と可視化していく記録者のことです。今回は、記録資料としても活用できるメディア表現の一つ、「ドキュメント・ウォール^{注2}」を用いました。具体的には、幅90センチ、長さ10メートルほどのロール紙を会場の壁面に張り、スクライバーがシンポジウムを中継して記録していきます。そのありように参加者は驚きと関心を寄せ、ドキュメント・ウォールの前に集います。記された内容をもとに自他の活動や出来事が共有され、活発な語り合いが展開しました。



(刑部育子・郡司明子)

1 企画

さて～
何やる～



『表現の源』って
何だろう？
そうだ
手から始めよう

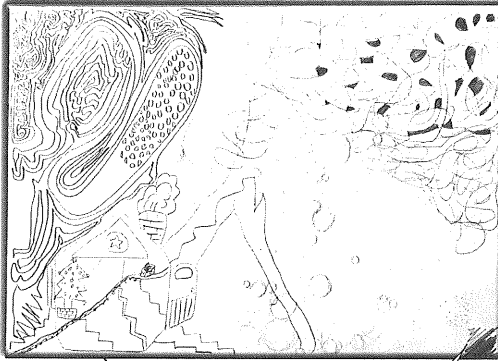
2 打ち合わせ



スタッフ打ち合わせ
こうやって
ああやって
身体接触

目を回してまた、
何かがこの世界に
挿入してく。

戸惑→集中→夢中という
ように、気持ちが変わって
いった感じがします。



3 ウォーミングアップ

指と指でふれあってみましょう。
何かが伝わってきませんか。
だんだん緊張がほぐれてきました。

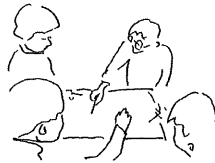
ポカポカ
もうすぐクリスマスですね

空 水 空気 けいはい
大地 希望 未来



4 ドローイング開始

“今”の気持ちを
そのままストレートに
Drawing



それぞれのペースで
心の中のことを
そのまま手の動きに
かえていきます。

堀井武彦（ほりいたけひこ）
お茶の水女子大学附属小学校教諭。アート（図工）担当。
研究紀要論文：「図画工学科の学習における「共視論」の一考察」

野口昌代（のぐちまさよ）
大田区立大森第四小学校教諭。

第I部 ミニワークショップ

うん。どんどん。そっ。ちさ。
 ー!! ぐんぐん... あ、ちにも。
 こ、ちにも。

とんぱんんがらていつ。
 つたがらていつ。もがのてが
 景帯しめててんてんく
 ーモノーのりてが
 生れつある。

6 みあう



へえ〜
 限りなく広がった
 4人の表現は
 おもしろい

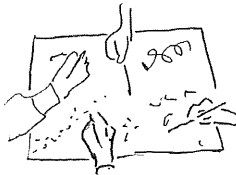


肩に力が入りすぎて
 いたが、心は、じんじん
 くるくるしてきて。

自由だな〜。
 のびのびと広がる
 世界!

5 まざりあう表現

互いの表現が
 いつしか
 自然に溶けあつて...



手が動けば
 心も動く
 いつしか4人の心も
 まざりあつて...

ハーフミラー グループ (辰巳・郡司・瀧田・堀井・野口)

辰巳 豊 (たつみゆたか)
 アート教育実践家。

郡司 明子 (ぐんじあきこ)
 群馬大学准教授。専門：美術科教育。

瀧田 節子 (たきたせつこ)
 東洋大学文学部非常勤講師。元図画工作専科教諭。
 専門：造形表現教育。

第Ⅱ部 実践事例の報告

1 附属幼稚園の実践

三歳児のA夫。入園当初から面白そうだと思ったことにはどんだんかかわっていましたが、やみくもに行動しているのではなく、行動する前に周りの様子をじっと見ている姿がありました。少し離れた所から入り込むように見て、自分のアンテナに触れることを見つけると、迷うことなく行動に移していくのです。A夫の姿を追っていくことで表現の源につながる何かが見つかるとはならないかと考え、視覚的な記録（動画、写真）を織り交ぜながらA夫が取り組んできた遊びを紹介しました。

四月、水を入れたビニール袋の中に小さい黄緑色の実を拾って入れ、目の前にかざして、揺れている実の動きをじっと見ていました。次の瞬間、A夫はグルッと回転して、また実の動きを見ました。見て感じたこと、発見したことを、身体を実際に動かして試している子どものありさまが感じ取れました。

十月、木の机を押すことで園庭に線が引け、回ること弧が描けていることに気付き、自分の軌跡を残す遊びに夢中になりました。

実が落ちている、線が残っているなど、日常の中のちょっとした変化

に気付くところからA夫の遊びは始まりました。見ているだけではなく行動に移していくことで、モノや状況に自分ごと（自分の関心事、身体まるごとの両方の意味を込めて）として入り込むことで、子どもたちはまねごと、借りごとではなく、自分を打ち出している、自分ってこうなんだと、ということを表しているのです。形としては残らないので見逃してしまいがちな子どもたちの行為の中に表現の源があるのではないかと、子どもたちが身体で表していることに注目して、感じている世界を保育者がわかろうとすること、「今」心を傾けていることに十分かわれるようにしていくことが、まずもって大事なのではないかと考えます。

（伊集院理子）



2 いずみナーサリーの実践

いずみナーサリーは〇〜二歳児の子どもたちが集う学内保育施設です。小さな子どもたちにとって、ナーサリーで過ごす時間は生活そのものです。お散歩に出かけたり、友達や保育者と一緒に遊んだりという日常の中で子どもたちがどのようなことを感じたり表したりしているのか。「表現の源」はどこから生まれてくるのか。

ドングリがたくさん落ちる季節、子どもたちは拾うことに一生懸命です。最初のころはどの子どももお散歩バッグにいっぱいになるくらい拾い集めていましたが、毎日同じ場所に行く中でその日、その時、その子によっての「お気に入り」とっておき「大事」が出てきたようです。

「落ちちゃった」から始まるアート

ある広場でナンテンの実を摘んでいるK子。K子は一つずつ摘んだ後、別の場所に移ってもナンテン



こからK子は実を手を取っては思いのまま置き換えたり、茎を土に挿したりしていました。土の茶色に赤い実がよく映えます。

落ちた時は「あーあ」と思ったかもしれませんが。しかしそこから、地面をキャンバスに、赤い実アートが始まったような気がしました。偶然の出来事から感じることで、新しい何かが生まれることが、子どもたちの周りではたくさんあるように思います。とっておくことでできないその時だけの、その瞬間だけの作品や表現は子どもたちの日常の中にあふれています。

(中澤智子)

第Ⅲ部 トークセッション

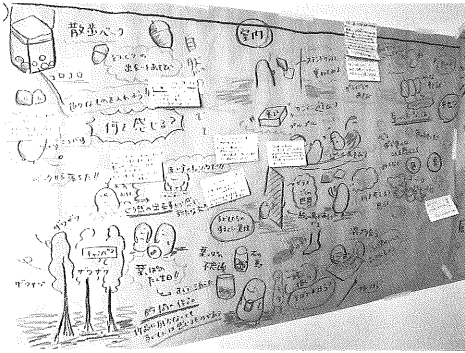
第Ⅲ部は参加者と共に「実践を通して表現の源を考える」対話的な場になることを願って企画されました。

最初に、今までのシンポジウムの流れを振り返ることから始めました。この時、新たな試みとして取り入れたドキュメント・ウォール、すなわち、スクリーン・ウォールと参加者たちが加えた付箋が、振り返りと共有を容易にしてくれました。参加者たちは第Ⅲ部が始まる前の十五分の休みの時間に、ドキュメント・ウォール上に感想や意見、質問などを記した付箋を付けてくれました。

参加者の付箋には「子どもにとって表現

活動が自らの軌跡を残すことと共に、これまでの経験を経験し直すこととなっているのだろうか」という表現にかかわる本質的な問いや、「ドングリ拾いの様子を言葉で表現すると、一人ひとりの様子がこんなにたくさんさんの表し方があるんだと思った」等がありました。

トークセッション中盤からは、「絵の具をこぼして家を汚されるようでは困ると保護者から言われるので、園では思い切った活動ができない」というような現場の本音の話も出てきました。このようなことに対して、参加していたいずみナーサリーの保護者からの「家で汚すようなことはありませんよ」という家庭における具体的なお話や、子どものこぼすという偶発的な出来事からさらに面白い表現が発展することへの着目、このようなことを保証する場があることへの大切さが語られました。さらに、教育では「……ねばならない」に縛られていることがよくあるけれども、アートの携わる人たちは活動の意欲的な展開を面白がり、そこから表現の世界を広げて



いくことを大切にする視点を持っており、そのような考え方に学びたいなどの意見も出されました。

今回の参加者は、保育にかかわる人だけでなく、小学校の先生方や美術教育に携わる人たち、また園の保護者の方たちとさまざまでした。最初は少し張りつめた雰囲気でしたが、参加者自らが表現にかかわるワークを通して、気持ちも和み、笑顔が見られるようになりました。また、第Ⅱ部の具体的な実践事例からさまざまなことを考えるきっかけが与えられ、最後の第Ⅲ部では参加者ご自身の実践の思いや疑問をぶつけてくださりました。このような参加者からの意見に対し、企画者側だけでなく、会場の参加者たちが自分の経験から意見を述べてくださるなど、このシンポジウムに集まった人たちが第Ⅲ部の対話の場を一緒につくってくださいました。

さまざまな思いを抱えてここにやって来た人たちが、難しいけれどもこんなことならできるかもしれないと、互いの意見を聴くことで小さな勇氣をもたって帰られた様子が印象的でした。(刑部育子)

1 注

今回は、看護の仕事や美術教育に携わり、さまざまなワークショップでスクライビング(記述すること)の経験を重ねた木村祐子氏に協力いただいた。

2 「ドキュメント・ウォール」の詳細は、茂木一司編集代表『協同と表現のワークショップ』東信堂 における原田泰の解説を参照されたい。



海外レポート

イタリア保育

おもいきって

参観記 (3)

未就園児と家族の集う「ルドテカ」

トスカーナ州フィレンツェ市

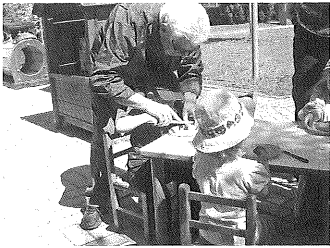
金澤妙子

(大学教員)

勤務先の海外長期研修制度で、

私はイタリア・エミリアローマーニャ州リミニ市に、二〇一二年四月から一年間滞在した。その七年前に五か月間の短期海外研修を同州ボローニャ市で行った際、当地訪問を勧められたことがきっかけである。

今号は滞在地リミニ市を離れ、トスカーナ州フィレンツェ市からのレポート。対象もLUDOTECAという未就園児施設である。



▲初回参観〈料理で遊ぶ〉の一コマ



悲しいくらい

二〇一二年四月、到着早々私はボローニャ市を訪ねた。前回研修当時の責任者は定年退職していたが、実務担当の秘書は、変わらず資料作成に携わっていて、新たな資料を用意して待っていてくれた。

もうかなり以前からイタリアも日本と全く同じ少子高齢化。何気なく言った「イタリアでは子どもは増えたか」という話題に、「移民が増えて数の上で一時期子どもの数が増えたことがあっても、イタリア人の子どもの数は増えていない。経済状況もヨーロッパ全体が悪い。今のイタリアで三人子どもを持つ勇氣

のある人はいないわね!」。彼女自身も協力者として名を連ねるポローニャ市及びエミリアロマーニャ州の「子どもと両親のためのセンター」の資料などを差し出しながら、「南イタリアには仕事がなく、北に働きに来ている人も多い。経済格差も大きいので、ひとくくりに『イタリアでは』という言い方はできないが」と前置きして、話は続いた。

「イタリアではパートタイムの仕事を探すのは難しい。働くということはフルタイムで働くことを意味する。今は経済的な理由だけでなく社会で働き続けたい女性が多い。一方、核家族が増え、地域のつながりも希薄だ。その中で子育てをする親は孤独を感じている、これをどのようにサポートしていくか、親同士のつながりをどうつけていくか……」。そんな話に及んだ時には、もうメモをとる必要はなかった。こんなことが同じでどうする!? そんな気持ちだった。小さな町で、道を尋ねた母親は、私が日本人だとわかると、「日本でも女性は、子どもは一人しかいないの?」と聞いてきた。私は「そうよ。イタリアの

ママと同じよ」と答えた。

ルドテカとは

この国のこうした状況へのサポートはどうなっているのだろうか。前回研修時、ポローニャ市では、待機児解消と仕事を持つ母親支援の一策として、子どもを数人ずつ集め、そのうちの誰かの家で市の認可保育を行う piccolo gruppo (小さいグループの意) に着手したばかりであった。

本稿は場所をフィレンツェに移し、二〇一二年九月まで利用者であった日本人の母親Mさんの体験談と、この一年の研修期間にMさん母子に同行したりしながら定期的に訪問し観察したこと、担当者や利用者に向ったことを踏まえて、ルドテカを紹介する。

ルドテカには、〇〜三歳までの子どもが保護者同伴でやって来る。開園時間は月〜金曜日の九時三〇分〜十二時三〇分。大人と子どもで園内の玩具・遊具で遊んだり、施設のスタッフが提案する活動に自由に参加して過ごす。親同士の交流の場でもある。

希望者は入会登録が必要（費用は無料）。

施設の担当者シモネッタさんは、勤務先の協同組合コペラが、老人や障害者のサポートをしている関係で、小学校での障害児の補助などをはじめ、さまざまな職種に携わってきた。初めて訪れた時、ほかに大学で学んでいるという男性がいた。日本の学生アルバイトとは違う、しつかりした社会人という印象の方で年齢も二十代という感じではない。この施設は、午前中は乳幼児の部、午後四時半以降は学童保育の部に幼児から十四歳までが来る。それも担当している。

お茶の時間

私は、始発電車でも出て十時ごろにしか着かない。着くとシモネッタさんはいつも大きな容器いっぱいのコーヒーを大人用に、子ども用にはお茶を沸かしている。「朝食（おやつ）にしましょう」と三部屋に散っているみんなに声を掛けて歩くと、五畳ほどの台所は子どもと保護者でいっぱいになる。朝食をとる習慣があまりないので、本当に「朝食」になる

子もいる。保護者がパンを持参している子もいる。ビスケットやクラッカーを差し入れる保護者の姿もよく見かけた。Mさんはこのコーヒーが楽しみだったという。「朝、あたふたと支度をして子どもとここに来て、このコーヒーでほっと人心地が付くひとときが貴重だった。あそこに行けばコーヒーが飲めると思つて来た。知らない土地、しかも外国での子育て、ここがなければどうなっていたことか」と話す。

提案活動構成の視点

お茶の後片付けが済むと、保育者が活動を提案する時間だ。何をするかを示す予定表は、毎月張り替えられている。曜日によって活動内容は違う。○月、月曜日は（絵本の部屋）、火曜日は（歌遊び）というように日替わりで設定される活動と自由遊びが組み合わされている。週の半ばの水曜日は自由遊びだけで何の提案もないのが、どの月にも共通している。季節や行事も取り入れるので同じ曜日でも日によって違う。シモネッタさんは、手を使う、目で見ると

耳で聞くというのを全部入れて一週間のプログラムを作りたい、コンスタントに来ているとそれら全部を経験できるようにしたいと考えていた。利用規則に「なるべく規則的に通うことが望ましい」とあるのはこんな思いからなのかもしれない。

初めて訪れた日は金曜日。この日の活動は、〈料理で遊ぶ〉。庭にテーブルを出し、ピワ、リング、サクランボを切り、食べる。子どもが小さいのでほとんど保護者が手を出しやってしまう姿と、それを振り払って自分でやろうとする子どもの姿があった。

〈絵本の部屋〉の日、シモネッタさんはマットやお年寄り用に椅子を出して準備する。そして開始を知らせるとみんな早速集まってきた本を手取る。それをシモネッタさんは壁に寄りかかってじっと見ている。本は市立図書館で借りてくる。ストーリーよりも、月の行事、食べる、感じる、色を念頭に入れて選んでいると話す。提案活動が終わり、「また明日」と帰っていくママは看護師で、今日は夜勤なので子どもとここに来たが、明日、子どもはおばあさ

んと来る。明日の活動を確認して帰っていった。

利用者の声

利用者へのインタビューも許されたので、どう思うか、もっとうこうしてほしい点、ここがなければどうかなどを聞いてみた。皆、特に不満もなくここが気に入っていた。ここがなければ公園に行っていると思うが、冬が困るという声が共通していた。午前中に乳児と、午後に小学生の孫と来るというおばあさん。別の所に行っていたがそのスタッフは居るだけで何もしない、こっちのほうがいいわという人。スタッフが素晴らしい、いい距離にいるという人。毎日来るというベビーシッターは、「全部かなっている」と言う。若々しくいられる。自分にとっていい所だと答えた人もいた。子どもだけでなく、自分たちの社会性の育ちにもここが必要だというおじいさんの答えに、私はうなづいてしまった。

以上は訪問初日の声だが、続けて聞いていくと、家族的だから好きだというおじいさんは、ここに来

れば公園とは違って深くコミュニケーションができると話す。社会全体が疎遠になっていられると言われる一方、その構成員一人ひとりとは他者とのかわりを求めているという気がした。

突然の危機

本誌編集発行人浜口順子さんと、夏休みに入る前に学童保育の時間帯に訪問すると、なぜか閉まっていた。開いていることは前もって確認したのでどうしたのだろうと思いつつも、予告なしにこんなことがよくある国、バカンスに行く人が多くて、開く必要がなくなって早めに閉めたのかもしれないなどと言いつつ、はるばるここまで足を運んだ浜口さん、Mさん母子と共に施設を後にした。だが、夏休み明けの九月半ば、Mさんからこんなメールが届いた。

用件 緊急連絡

14日にルド テカに行ってきました。実は市の財政難で七月の上旬から閉園したままであることをその日に知りました。先生方と個人的な連絡ができないので、

詳細はわかりませんが、今のところいつ再開するかは未定ということです。誰にでも自慢できるルド テカ。早い解決を祈るばかりです。

再開と不安、不満、怒り

再開は難しいと思ったが、朗報は意外に早かった。用件 ルド テカ、再開のお知らせ

いつ再開するかわからないとされていたルド テカが来週から再開するという電話をいただきました。先生も従来と同じで、ホッとしています。やはり、これからの季節には、子育てが孤独にならないためにも必要ですから。本当に良かったと思っています。

すぐに出かけてみると、十二組ほどの大人と子どもがいた。男性保育者はいない。保護者は、ここに至るまでや、財政難による市のこの対応への不満、今後のことを話題にしていた。何よりシモネッタさんは怒っていた。そして、「一人なので、せっかく来てくれても活動の提案ができないわ」と残念そうだ。「自分たちの組合が市の公募に通れば資金も出て、

人が来てくれる。そうするとおもしろいことができる。この年齢の子どもは五感に訴えることができるから、ただ鍵を開けているだけではだめだ」と、活動へのこだわりは強かった。

母親にも聞いてみると、みんな活動は好きなのであった。Mさんも、活動があると親子共にリズムができるという。三十キロくらいのセモリナ粉を子どもの前に置いて、シモネッタさんは何もしないで見ている。子どもに任せる人、早く行ってごらんとか、触ってみると促す大人や近寄る子どもなど、ほかの親と子どもの距離やかかわりを見ることができた、と活動を支持する。活動にこだわらない私も、それは確かに家庭ではできない経験だろうと思った。

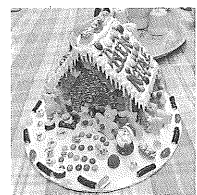
シモネッタさんがこの仕事をするきっかけは、「午前で終わるから」。まだ母親を必要とする娘さんのためだ。閉園しても、勤務先の別の部署に変わるが失職するわけではない。だが、「この地区で自分たちの協同組合が初めてルド テカを開いた。その最初からかかわってきたのよ。情熱がなければこの仕事は

できないわ」とも言う。現実的な選択なのに、実際の仕事ぶりは熱い。

かつての同僚と共に

十二月に行くと、新しいスタッフがいた。かつてここで一緒に働いていた人だという。公募の結果はまだ出ていないが、勤務先に人を要求して、何とか二人は一緒に働いてもらえるようになったようで、二人は学童保育で使用するスペースに、クリスマスマスのオーナメント作りの場を設定していた。二人で大きな机を運ぶ姿を見ると、活動の実現は一人では無理という主張はわかるような気がした。

年明け初訪問は二月のある金曜日、〈手を使う活動〉。口に入れるものは保健所の規制で難しくなっていると聞いた。部屋が狭いので入れられない、廊下で見ると言う、粉が飛ぶので戸も閉めると言う。外から窓越しに見ると言う私の提案も、大人の気が散ると却下されてしまった。説明を聞きながら、思いが噴き出している感じがした。―次号はパドヴァから―



▲クリスマスの筆者の差し入れ(大家さんお手製のお菓子の家)

研究

『幼稚園』の原著者

をさなほのその

ベルタ・ロンゲのルーツをたどる 1

インゲグロレ(史学博士)

ディーター・レドナック(史学博士)

翻訳／ベルガー有希子(公立幼稚園教諭)

解説・写真提供／大戸美也子(幼児教育史研究者)

連載にあたって

わが国最初の幼稚園である東京女子師範学校付属幼稚園の開業に先行して、明治九年一月に『幼稚園 卷上』が文部省から出版された。本書は、幼稚園の創設者F. フレーベルが創案した教育玩具である恩物と手技の取り扱い、及び遊戯等を図入りで解説した幼稚園教育の手引書である。草創期の幼稚園教育の実践者にとって極めて重要な参考書であったことは、最初の保姆・豊田英雄の遺した伝習記録(『代紳録』)等からも裏付けることができる。本書について、これまでさまざまな角度から検討が加えられてきたが、原著者のロンゲ夫妻については日英米の文献を探っても断片的あるいは正確さを欠く情報しか得られない状況にあった。ところが、意外なところベルタ・ロンゲ夫人(以下、ベルタと表記)をめぐるさまざまな情報が眠っていたのである。昨年六月、筆者はベルタのルーツを探るためにハンブルグ市を訪れた。その時、通訳の労をとってくださったベルガー有希子さんが、ベルタの父親である実業家CH Meyer(以下、マイヤー氏と表記)の資料館の存在をつきとめてくださった。ところが、追いかけるように資料館の担当

大戸美也子(おおとみやこ)

長年、保育者養成・現任保育者の再教育に従事。近年は、幼稚園教育導入に関する日英米の比較研究を展開。

者から、資料館は二〇一二年一月に焼失したこと、その代わりに資料館の資料を使ってマイヤー氏について著書を著わしているディーター・レドナツク博士を紹介したいとの連絡が入り、六月上旬、ハンブルグ市でレドナツク博士との出会いが実現したのである。この日、レドナツク博士は、「マイヤー氏の娘たちのことは、こちらが詳しい……」と、女性解放運動史を専攻するインゲ・グロレ博士を同伴して現れた。二人は、早速、私たちをマイヤー家の資料館の焼け跡へ案内してくださり、焼け跡から持ち出されたままの雑多な資料の中からマイヤー氏や子どもたちに関する資料を選んで指し示しながら私の疑問に次々答えてくださったのである。その後、マイヤー氏の興した工場や水路、あるいは別邸など現存している諸施設を実際に見て回り、その道々ベルタをめぐるさまざまな「秘話」まで聞かせていただく恩恵に浴したのだった。

レドナツク氏もグロレ女史も、幼児教育界とはまったく接点を持つことなく、それぞれ独自に『幼稚園』の原著者ベルタの父親やベルタ姉妹が積極的に参加したハンブルグの女性解放運動について調査研究を進めてこられた。幼児教育関係者がお二人の研究成果を共有できれば、幼稚園の世界的展開の先駆けとなったベルタに関する不透明な部分を照らし、幼児教育史に新しい情報をもたらすことは明らかである。そこで、筆者は『幼児の教育』編集委員会に彼らの論文掲載の検討をお願いし、ここに実現する運びとなったのである。

ベルタが生きた時代から一世紀半を経て、女性の社会的地位も幼児期の教育もはるかに向上した。しかしながら、女性の幅広い社会的進出を求め、また質の高い乳幼児期全体の保育と教育への要求ははるかに大きくなり、かつてベルタ等が為した挑戦と努力は、現代社会にあつてもさらに力強く継承しなければならぬものである。本連載がそのような継承の力の糧になれば誠にありがたいことである。

(大戸美也子)

ベルタと幼稚園教育との出会い

— ハンブルグでの幼稚園教員養成講座に参加

インゲ・グロレ



翻訳／ベルガー有希子

一八四八年、ヨーロッパに「国民の春」が訪れ人々は自由を謳歌したが、女性たちもまた次々に画期的な活動を始めた。

「ハンブルグ市では、社会的な壁を少し取り除き、女性解放につながようとする同志的な女性たちの小さな組織が誕生した……」

これは、一八四八年四月に結成された「ソーシャル協会」(Sozialen Verein)の議事録の冒頭の一節である。この協会結成で意義深いことは、必ずしも親しい関係にはなかったユダヤ教徒とクリスチャンの女性を会員としたことであった。彼らは、「女性解放」や「ヒューマニズム」あるいは「倫理観」など

に、共通の考え方を持ってはいしたが、互いの文化や生活習慣については全く無知であった。ところが彼らは宗教的偏見や社会格差を克服しようと志を一つにしたのである。

「ソーシャル協会」の誕生

この協会は、はじめヨハンナ・ゴールドシュミット夫人(一八〇六一—一八八四)の自宅で会合をもった。彼女は、裕福な改革推進派の商人モリッツ・ゴールドシュミットの妻であり、八人の子どもたちの母親であった。父親のマルクス・ヘルツ・シュバールは、ハンブルグ市の「新イスラエルテンプル協会」

Inge Grolle(インゲ グロレ)

長年、歴史教科書作成に携わる。ハンブルグ女性解放運動研究者。

の発起人の一人として厳格なオーソドックス・イスラエル教区からの分離を図った人物である。

ゴールドシュミット夫人は、自由で開放的な雰囲気の中で育つたため、自分の子どもたちにも自分と同じような環境で育てようとした。しかし、当時はユダヤ人というだけで、差別や制約を受けていたのであった。こうしたユダヤ人の虐げられた状況をハンブルグ市民に伝えるために、『レベッカとアマリア―ユダヤ婦人と上流婦人の間にかわされた時事問題や人生問題についての往復書簡』という小説を著わした。この本は、予想通りキリスト教の読者の間で好評を得、特に上流階級の女性たちで構成する「ドイツカトリック運動を支援する婦人団体（一八四六年十二月結成）」の反響は大きかった。

ドイツカトリック教は、自由でキリスト教の宗派から離れて教義上の強制や聖職階級の無いドイツナショナル教会を目指し、すべての教会員は、たとえ女性であっても同じ権利が与えられていた。ハンブルグ市に新設されたこの自由教団の会員たちは、収

入源として寄付に頼っていたため、女性たちはバザーを企画し呼びかけた。このような企画を一致団結して実施することで、彼女らは自分たちが社会的にも何らかの役割を果たせようだと自覚するようになっていった。そして、週一回意見交換の会合をもつようになった。この「ドイツカトリック教会を支援する婦人団体」の会員の中に、進取の気性に富む実業家H. C. マイヤーの娘たちがいた。中でも長女のアマリエ・ヴェステンダルフ夫人は、ハンブルグのユダヤ人差別の話に強く心動かされ、著者のゴールドシュミット夫人を自分たちの団体の会合に招くことにした。このようにして両者はつながり、ユダヤ教徒とクリスチャンの女性が一緒に会合をもつという前代未聞の「ソーシャル協会」が誕生したのである。

新しい「ソーシャル協会」の会合は、会員の自宅で十四日ごとに持ち回りで行われた。はじめ、二つのグループにはよそよそしい雰囲気があったが、やがて共通のテーマ、子どもへのかかわり方や教育に

関するテーマを見いだしていった。会員のエミリエ・ブステンフェルド夫人は、子どもたちのために午後に「集会」を立ち上げ、これにより女性たちはお互い打ち解け、広く「時事問題や人生の問題」についても意見交換するようになっていった。

「ソーシャル協会」の活動目標をめぐる葛藤 — 幼稚園開設か、女子大学開設か

一八四九年二月二十一日に、ハンブルグ市議会はユダヤ人の市民権を認めたため、それまでユダヤ人に禁止されていた職業選択も可能になった。ソーシャル協会員は喜びに沸き、一八四九年三月四日には、ブステンフェルド夫人がユダヤ人姉妹のために祝賀会を開いた。この席上、ヴェステンダルフ夫人はこの活動の持続的發展を願って、素晴らしい提案——ハンブルグ市に幼稚園を創設し、幼稚園の生みの親であるF. フレーベルを招くという提案をしたのであった。この提案は、全員一致で可決し、幼稚園の普及が「ソーシャル協会」のはっきりとした目標とな

っていった。幼い子どもたちに自由でありながら系統だった働きかけをすること、あるいは母親の育児の質を重視するフレーベルの考え方は、女性に社会参加への途を拓くものだった。育児が、次世代にかかわる重要な社会活動であったからである。F. フレーベルは、「子どもの養育は、人間の養育である」と説き、それこそが国民の使命としていた。女性たちは、フレーベルの保育理論の根底にある革新的で先見的な考えを見抜いていたといえよう。そのことは、一八五一年に反動主義のプロイセンで幼稚園禁止令が出されたことからもうかがえる。

ゴールドシュミット夫人は、協会とF. フレーベルとの連絡係となった。フレーベルもまた、「遊ぶ子どもへの関心を共有しながら、ユダヤ教徒とクリスチャンが社会的に接近すること」を歓迎した。そして、ハンブルグで幼稚園の教員養成講座を半年間実施することを承諾したのであった。

しかし、フレーベルとの交渉は難航した。一つには、彼が小さな協会が支払える以上の報酬を要求し

たからである。さらには、ドイツカトリックの宗教政治運動のカリスマ指導者だったヨハネス・ロンゲの支持者たちの間から女子大学開設の動きが出てきたことも障害となった。学長としてF. フレーベルの甥、K. フレーベルが候補に上っていた。K. フレーベルとロンゲは、女子大学構想を打ち上げ、女性に高等教育を与え、この近代的な教育機関で自由主義の保育を基礎とする「家庭内の職業教育」を狙ったのだが、チューリッヒでの彼の試みは必ずしも成功してはいなかった。ところが、F. フレーベルの愛弟子だったアマリエ・クリューガーが、K. フレーベルをハンブルグの女性たちに取り次いだのである。アマリエは、大学教育と幼稚園教育とは根が一つであると確信してこの二つを同じ場所、つまりはハンブルグに設置することを強く望んだのである。しかし、F. フレーベルは、女性の大学教育には懐疑的であったから、甥と争い、同じ場所で活動することを拒んだのであった。

一方、ハンブルグの若い女性ブステンフェルドと

友人のH. C. マイヤーの二女ベルタ・トラウン夫人^{注2}とは女子大学構想に魅了され、K. フレーベルの人物と彼の計画を知るために二人はチューリッヒまで出かけ、ハンブルグへ戻ると、今度は女子大設立計画を熱心に伝え全力を尽したのだった。しかし、大学開設のためには、資金提供を誰に依頼し、教授陣をどうするか、また大学入学者の宿舍をどうするかなど、検討しなければならぬことが山積していた。時間は迫っていた。というのは、革命が失敗すれば革新のための好機を逃がすかもしれないのである。素早いエネルギーシユな行動だけが、この計画の実現に必要なだった。「ソーシヤル協会」の仲間から、ブステンフェルドとトラウン両夫人の独断行為に対して非難の声も出てきた。

幼稚園と大学のどちらを優先すべきか？ ゴールドシュミット夫人は、二人に欺かれたような気がした。彼女は、リーベンシュタインでF. フレーベルと会い、すでに彼の考えに賛同していたからである。ゴールドシュミット夫人は、母親として幼稚園の存

在に確信を持っていたので、フレーベルの精神に基づき保育の手引書を著わした。この本は、驚くほど現代的な原理を含んでいた。F. フレーベルの考えを伝えようとする彼女の願いは、女性の高等教育を望む協会の妨げを受けるのだろうか？ 二人のフレーベルを結び付けようとしたクリューガーの働きかけは何の効力を持たず、F. フレーベルは和解を拒み続けた。しかしながら、ゴールドシュミット夫人は、F. フレーベルに窮状を上手に説明し、彼の要求はすべて受け入れられたのである。

革命の初期段階では、新しい活動が交じり合うことはよくあることだ。どの考えが実現可能で適切であるかどうかは、続けていくうちに明らかになっていくものである。一八四九年十月三日の「ソーシャル協会」の会合で、ゴールドシュミット夫人は、F. フレーベルが考えを変えてハンブルグへ来てくれることを伝えた。F. フレーベルは、冬の半年間、二十二人の受講生を対象に幼稚園の教員養成講座を開

き、また労働者教育協会の講堂に、あらゆる社会層の子どもたちが通える最初の市民幼稚園を開き、翌一八五〇年一月一日には女子大学註3も開校された。

幼稚園は、永遠に続く宿命にあったといえる。現に、幼稚園は今なお世界中に存在している。ゴールドシュミット夫人は、その後もブステンフェルド夫人と女子教育の基本をめぐって衝突を繰り返した。しかし、結果的にはこの個性の強い二人の女性は、キリスト教徒とユダヤ教徒からなる小さな協会が目指した目標、「社会的差別と先入観の撤廃」の達成に多大な貢献を果たしたといえるのではないだろうか。

注

1 バッド・ブランケンブルグのフレーベル博物館に、幼稚園の普及に貢献した五名の女性が紹介されているが、彼女はその一人である。一八六〇年に「ハンブルグフレーベル会」を創設。

2 マイヤー家の二女ベルタは十六歳でトラウン氏と結婚。一八五〇年に離婚し、ロンドンへ移住。翌年、ロンゲ氏と再婚した。

3 マイヤー家の五女マルガレータはこの大学の一期生で、後にロンドンに開設した姉ベルタの幼稚園を手伝った後、シュルツ氏と結婚しアメリカへ渡り、最初の幼稚園を開設した。

子ども学の

ひろば

お茶の水女子大学 ECCELL 社会人プログラム 「変革期の乳幼児教育・保育を考える」 平成25年度 後学期(10月開講) 受講生募集

現職保育者をはじめ保育・幼児教育や子どもにかかわるすべての方々を対象に、豊かな学びを実現するためのカリキュラムを夜間(18:20~19:50)に開講しています(科目等履修生登録)。

【開講科目】

「乳幼児教育・保育政策論Ⅱ」(火・逆井直紀)

「子どもと家族」(水・加藤邦子)

「現代保育課題研究Ⅵ」(木・浜口順子ほか)

「比較保育実践研究Ⅲ」(10/26-28集中・翁麗芳)

「子ども家庭支援相談Ⅱ」(1/4-5集中・安治陽子)

【出願期間】平成25年7月22日(月)~26日(金)

【URL】<http://www.cf.ocha.ac.jp/nyuyoji>

【Eメール】nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp

【TEL】03-5978-5949 (担当 安治)

お茶大子ども学ブックレットの紹介

お茶の水女子大学ECCELL(乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築)で企画した子ども学シンポジウム、保育フォーラム、特別講義などの記録を少しでも多くの方々と共に共有するためにECCELLが発行している冊子です。今までに2冊が出ており、今後も順次発行します。

Vol.1 第1回お茶大ECCELL子ども学シンポジウム
子育て力の危機と創生
~エンパワーメントの視点から~

Vol.2 第2回お茶大ECCELL子ども学シンポジウム
今、子どもが育つ環境を考えるⅠ
~「ナージャの村」本橋監督をお迎えして~

実費にてお分けいたします。ご希望の方はECCELL事務局nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jpまでお問い合わせください。

本の紹介「ことばと身体「言語の手前」の人類学」 菅原和孝 講談社選書メチエ 2010年

多くの保育者や保育研究者にとって「身体」を考えることあるいは「身体論」はそもそもとても親和的だ。人はからだだけで生きられないことを、こと保育という営みにおいては否応なく知らされているから。

「共存する者たちの所作がたがいにに対して表情をおびているということが、その場に展開される相互行為に内的な一貫性と秩序を与える。」と語り、かのメルロポンティの思考の特徴を一口で言うなら「手前」であること、だという。学生の日常会話や民俗芸能の身体資源の伝承などの事例がたくさん詰まっています、フィールドワークの知に、改めて魅かれる。(K)

絵本の紹介『富士山うたごよみ』 俵万智(著) U.G.サトー(イラスト) 福音館書店 2012年

立春、啓蟄、大暑、秋分、冬至など、中国から伝わった「二十四節気」に従い、見開きが一つの節気を表現、卓抜したアイデアの富士山と、短歌と、やさしい説明の文章で構成されています。以下、夜間授業の受講生からのEメール。

「先程、就活のために本を探しに池袋のJ書店に寄ったのですが、1階の『最新話題本 芸術』のコーナーに『富士山うたごよみ』を発見しました!平積みでした!…用件はそれだけです、すみません(笑)。平積みになっている本を見て、ああ面白かったなあ、よかったなあと(この本を紹介された)授業を思い出しました。そして、ムショーに先生にお伝えしたくなった次第です。」ということで、お薦めです。(K)

エピソード

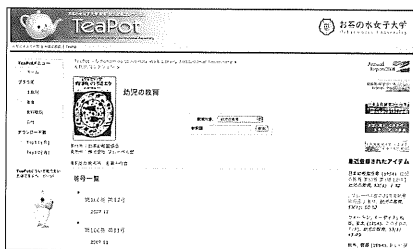
今号の特集は「規範意識」というちょっと取っ付きにくいテーマを掲げてみました。「規範」という言葉には「守る」とか「従う」という動詞がつきものですが、そこに至る過程が特に幼児期には重要だということが語られています。

ついこの間、少し心に余裕ができ、「積ん読」になっていた加島祥造さんの詩集『受いれる』を手に取りました。「受いれる それは 両方のひらを開いた姿勢だ 共に生きよう、という共存のジェスチャーだ」「受いれる それをいやいやすると 隷属になる すすんでやるときは 主人だ」。今回のテーマにもつながる言葉が心に響いてきました。<自分からすすんで共に生きることに向かっていく> 大人にとっても子どもにとっても変わらぬテーマなのかな、ふと思いました。(1)

幼児の教育 バックナンバーを WEBページで公開中

「幼児の教育」または「TeaPot」で

検索 



<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/handle/10083/3705/bulletin/>

明治34年発行の創刊号から、現在、平成21年発行の第108巻までご覧になれます。

なお、自由投稿、「ひろば」への情報などお待ちしております。
nyuyoji-info@cc.ocha.ac.jp まで。

次号予告 幼児の教育 秋号 2013年9月刊行予定

新企画も好評! 充実した内容でお届けします。

特集 問い直そう、保育の中のあたりまえのこと11
— 感性の豊かさは — 和久洋三先生インタビューほか

シリーズ 子どもが育つ場所を訪ねて — 岩屋保育園(京都府京都市) —

好評連載 保育エッセイ 本田和子先生

※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

幼児の教育 夏号 第112巻 第3号

平成25年7月1日発行

編集発行人/浜口順子

編集担当/田中恭子

発行所/日本幼稚園協会

〒112-8610

東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所/株式会社フレーベル館

電話:03-5395-6604(編集)

振替/00190-2-19640

印刷所/図書印刷株式会社

定価/750円(本体715円)

©日本幼稚園協会 2013 Printed in Japan

編集委員/伊集院理子

上坂元絵里

菊地知子

佐治由美子

宮里晴美

編集協力/フレーベル館

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●

くらしの素顔

保育の場の子どもたち

秋田喜代美

くらしの
素顔
保育の場の子どもたち



保育実践の現場から著者が感じ考えた園のくらしについての13の思索と、園生活を描いた12冊の絵本の解説より、目の前の子どもの素顔から、園のくらしのあり方、保育の本質を問い直すことができます。

- 著者／秋田喜代美
- 価格／1,365円(税込)
- サイズ／21×15cm
- ページ数／152ページ

「幼児の教育」

園のくらしを育む

連載第1回～13回までを収録!

10931

ポイント1

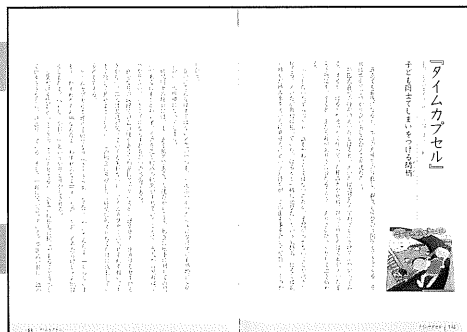
秋田喜代美先生による新鮮な保育の視点

著者が園の生活に立会い、保育の本質を探った第一部には、日々の保育のヒントとなるエッセンスが満載です。

ポイント2

園の生活を描いた絵本の読み解きが面白い!

書き下ろしの第二部では、定番～新作まで12冊の絵本を研究者の視点で読み解きます。普段読み聞かせている絵本の奥深さに触れて、保育の幅がぐ～んと広がります!



保育の学校

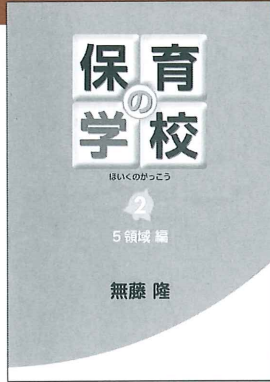
平易な言葉でわかりやすく。
保育をふりかえり、考え、
深めていくための16講義。

無藤 隆 / 著

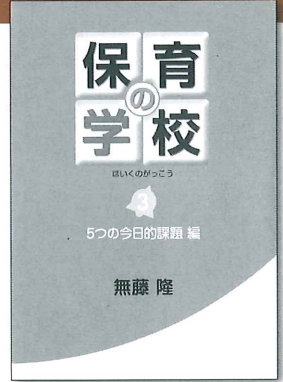
21×15cm 136ページ 定価各1,365円(税込)



保育の基本と学び 編
10931
養護と教育の一体的保育、教育課程・保育課程と指導計画や、数・図形、文字などについての講義。



5領域 編
10932
「健康」「環境」「人間関係」「言葉」「表現」の5領域と、体験の多様性と関連性についての講義。



5つの今日的課題 編
10933
子育て支援、評価、小学校との連携、特別支援、食育、保育の5つの今日的課題についての講義。

Point
保育を考えるために、16のテーマを設定。すべての講義が
予習→講義→まとめ→小検定
で構成されているので、園内研修にも最適です!

う言葉が入っているわけです。
◆図1 教育と福祉の関係

子どもの最善の利益
ところで、子どもの最善の利益という表現についてですが、この、最

▲図解でわかりやすく!

2) 「子どもの最善の利益」を英語ではどう表記するでしょう。選びなさい。

1. good interest 2. better interest 3. best interest

3) a、bに入る言葉を選択肢から選びなさい。

保育所は、(a) でなければならない、という表現をしています。教育学を勉強するから、この、(b) という言葉がややこしい言葉であるということを知るべきをえないのですれば、例えば、教育委員においては、幼稚園は教育の場なのです。教育委員の中に、(b) という言葉はあるにはあるのですが、(a) という表現はないという

▲ポイントを再確認!

定価 七五〇円(本体七二五円)☆